

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol.

16

スポーツと女性活躍社会

Sports and Women's Empowerment Society





SANNO UNIVERSITY

マネジメント理論と実践を柱に ビジネスプロフェッショナルを育成

産業能率大学は、世の中で実際に役に立つ能力を育成する実学教育を根幹としています。
社会人・職業人としての基本的な能力やビジネスの実務知識とスキルを身につけ、
また、主体性を持つ自立したビジネスパーソンとしての教養を養うため、
「真剣に取り組む力」「実行する力」「深く学ぶ力」に焦点を絞ったカリキュラムを設計しています。
また、コンサルティング機関である総合研究所と連携し、
ビジネスの最新情報や最先端の動向を教育に取り入れるべく企業や団体との提携に取り組むなど、
産業界に最も近い大学として学外とのコラボレーションを積極的に進めています。



CONTENTS

特集 スポーツと女性活躍社会

- 04 研究員紹介
- 05 巻頭言
- 06-08 01 世界標準のウーマン・エンパワーメント実現に向けた挑戦
- 09-10 02 様々な視点で楽しむ好奇心
- 11-13 03 大学選手権 2 連覇を達成して
—女性アスリートとしてのこれまでとこれから—

RESEARCH REPORTS

- 14-15 04 大学運動部サポートプログラム：
第 7 期リーダーシップ養成プログラムの実施報告
- 16-17 05 サッカー部 3 年生対象キャリアサポートプログラム
「サッカーと私—これまでとこれから—」
- 18-19 06 プロ野球ファン心理研究
—心理検査を用いた教育実践—
- 20-21 07 2024 パリ五輪への期待感を高めた 2023 W杯
- 22-23 08 アリーナの社会的意義を考える
～プロバスケットボールの視点から～
- 24-26 09 2023 年度 本学姉妹校 銘傳大学
「スキー・日本文化体験研修」実施報告
- 27-30 10 SANNO スポーツマネジメントのあゆみ (2004-2023)

研究員紹介

Staff

■ 研究所長



中川 直樹

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



木村 剛

産業能率大学
経営学部 教授

■ 研究員



齊藤 弘通

産業能率大学
経営学部 教授

■ 研究員



小野田 哲弥

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



椎野 睦

産業能率大学
情報マネジメント学部 教授

■ 研究員



高瀬 裕也

産業能率大学
総務部 秘書課

■ 研究員



駒澤 恵一

産業能率大学
湘南事務部 湘南教務課

■ 客員研究員



行方 剛

行方剛スキークリニック
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



川合 俊一

日本バレーボール協会 会長
日本ビーチバレーボール連盟
会長
朝ケイ・プロス代表

■ 客員研究員



川合 庶

産業能率大学
女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ
日本バレーボール協会
ビーチバレーボール本部長
産業能率大学
情報マネジメント学部 兼任教員

■ 客員研究員



西野 努

浦和レッドダイヤモンズ

■ 客員研究員



水谷 尚人

公益社団法人
日本プロサッカーリーグ
カテゴリーダイレクター
産業能率大学 客員教授

■ 客員研究員



中島 靖弘

NPO 法人湘南ベルマーレスポーツ
クラブ トライアスロンチーム
GM

※研究員肩書きは
2024年5月1日現在のものです

特集

スポーツと女性活躍社会

2023年6月に発表された世界経済フォーラム（WEF）の「ジェンダーギャップ報告書」によると、日本は男女平等の達成度合いで146カ国中125位であることが報告されている。この結果は、前年の116位から順位を下げっており、過去最低の順位となっている。そして、「経済」と「政治参加」の分野におけるジェンダーギャップの解消が、我が国のより一層の発展のための課題であることが指摘され、国は女性活躍推進法等の立法を行い政策としてその改善に取り組んでいる。

同様に我が国スポーツ界における、「する」「みる」「ささえる」スポーツ分野においてもジェンダーギャップが課題として挙げられている。例えば、平成29年度スポーツの実施状況等に関する世論調査（スポーツ庁）によれば、女性のスポーツ実施率、スポーツ観戦率およびスポーツボランティア実施率は、全世代を平均すると男性と比較して低いことが報告されている。

その背景には、

- ①女性競技者の月経周期異常の問題
- ②家事や育児によってスポーツに関わる時間が少ないという問題
- ③小中学生の女子におけるスポーツへのネガティブなイメージといった問題
（小学校中学年以降に女子が取り組める運動・スポーツ種目の少なさ、女性スポーツ指導者の少なさ、スポーツ嫌いを訴える女子の多さ）
- ④スポーツ環境における男女格差の問題
（例えば、スポーツチームにおけるボランティアでは、指導や審判は男性の参加率が高いが、お茶出しや事務作業、子どもの世話などは圧倒的に女性の貢献度が高い）

等が挙げられている。

そこで、我が国のスポーツ界においては、スポーツに関わる活動のジェンダーギャップを解消しようとするプロセスを通じて、女性活躍社会の実現を目指す機運を高める動きが活発化してきている。2021年9月に日本では女性初のプロ・スポーツリーグであるサッカー「WEリーグ」が開幕したが、リーグ名称の「WE」は「Women Empowerment」の略であり、WEリーグでは「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」という理念を掲げ、リーグの社会事業「WE ACTION」を通じて「女性活躍社会実現」を牽引する組織となることを謳っている（Women's Empowerment Report 2021, 日本サッカー協会女子委員会）。

本学においても、体力や技術の性差に気兼ねすることなくスポーツを楽しむ体験を提供することを目的として、情報マネジメント学部の実践科目（サッカー）に女子クラスを設置し始めたが、その効果についての検討を今後に行う必要性を感じている。

今号では特集テーマを「スポーツと女性活躍社会」とし、本学と関わりのある4名に、女性活躍社会実現のためにスポーツが貢献できることを検討する上で、ヒントとなる考えや取り組みについてのインタビューを行った。それぞれの立場から示唆に富む内容を語って頂いたので、是非とも一読をお願いしたい。

中川 直樹（スポーツマネジメント研究所長）

01

世界標準のウーマン・エンパワーメント実現に向けた挑戦

株式会社 湘南ベルマーレ 取締役副社長
大和シルフィード株式会社 代表取締役社長
産業能率大学 情報マネジメント学部 兼任教員 **大多和 亮介 氏**



2023年7月に株式会社湘南ベルマーレの取締役副社長に就任した大多和亮介氏は、女子サッカープロリーグ「WEリーグ」への参入を目指し、2020年10月に株式会社化した「大和シルフィード」の社長でもある。前職の横浜F・マリノス時代には、メディア&ブランディング部長として「マリノス沸騰プロジェクト」をはじめとする様々な施策を成功へと導いた。卓越した手腕と経験値を持つ大多和氏の「女性とスポーツ」に対する課題認識と展望についてうかがった。

インタビュー・文：情報マネジメント学部 教授 小野田 哲弥

1. 原点としての1998、転機となった2019

このたびは湘南ベルマーレ副社長へのご就任おめでとうございます。大多和さんは、なでしこリーグ「大和シルフィード」の社長も兼任され、「女性とスポーツ」というテーマに対して高い課題意識をお持ちだと伺っております。早速ですが、ご経歴上、どのあたりから女性スポーツに関心を持たれたのですか？

原点は1998年の長野オリンピックです。里谷多英さんが冬季競技の日本人女性として初めて金メダルに輝いた「女子モーグル決勝」の舞台を現地でご覧しました。元々アルペンスキーに打ち込んでいたので、何かの競技を観たいとは思っていたのですが、チケットがたまたま手に入ったのがモーグルの決勝だったんです。ちなみに今でもそうですけど、男女が並列する競技って、迫力がある男子の方を最後にとっておいて、たいがい女子の方が先にやるんです。

確かに、言われてみればマラソンなどはそうですね。

でもその日は違いました。自然を相手にする競技だから、当日の天候や雪の荒れ具合、中継のスケジュール等を踏まえて、男子が先で女子がトリになったのだと思います。結果金メダルを獲得した里谷さんですが、予選は10位でした。決勝は予選下位の選手から順に滑るので、里谷さんの後に9人も選手が控えているということです。普通は抜かれるんですが、里谷さんがスーパードライだったのもあるけど、誰も抜けなくて、徐々に会場がざわついてきました。そして予選3位の選手が抜けなかった時点でメダルが確定して「わー」と地響きのような歓声が上がった瞬間の記憶は今でも忘れられません。

予選2位の選手も抜けなくて、ついに予選トップの選手が出てきました。さすがの滑走で途中まではパーフェクトでした。ところが最後の最後にミスをしてしまった。本当に奇跡というか、予選10位だった里谷さんが日本女子初のモーグル金メダリストになったんです。その劇的な場に居合わせた経験が自分のスポー

ツビジネスの原点であり、女性アスリートとの最初の接点だった気がしています。

なるほど。男女の順が反転する競技の特殊性や、現地ならではの臨場感など、重要なエッセンスが凝縮されたエピソードですね。

その時の感動が土台にはありますが、大和シルフィードへの移籍を決定づけたのは、2019年のフランスでの女子ワールドカップです。優勝したのはアメリカチームですが、なんと彼女たち女子サッカー代表がアメリカサッカー協会を相手に訴訟を起こしていたんです。「イコールペイメント」（※男女の報酬体系を平等にせよ）という運動で。その中心人物が大会MVPにも選出されたミーガン・ラピノー選手です。その訴訟自体は一度敗訴するんですけど、大会後にラピノー選手がニューヨーク市庁舎前で行ったスピーチは全世界に拡散しました。あれは衝撃的でした。そういういわゆる社会課題とスポーツとの接点が、世界の女子サッカーにおいて巻き起こっていたというのが大きかったですね。

長野オリンピックの直後に大学に進学され、大学院までスポーツビジネスをご専攻、その後は横浜F・マリノスのフロントとして華々しいご活躍をされます。傍目からしますと、日本有数のビッグクラブから大和シルフィードさんへのご転職はかなり大きな決断に思われるのですが…

6万人の観客を迎えた次の試合が600人以下でしたからね（笑）。でも若い頃から、スポーツビジネスにおける次の収益構造の核とか、よりダイナミックに新たな投資を呼び込むためのアイディアはないのかという想いが常に自分の中にあっただので、ミーガン・ラピノー選手のスピーチを聴いて、女子サッカーというフィールドで挑戦しようという気持ちが固まったんです。

2. 女子サッカー以外にも普遍化できる実践

その大和シルフィードさんではどのような取り組みをされたのかになります。

移籍したのは、ちょうどWEリーグ（2020年7月設立、2021年9月開幕）ができる頃でした。WEとは単語としての「わたしたち」の意味もありますが、公式には「ウーマン・エンパワメント」（※直訳すると「女性を力付けること」）の略です。WEリーグ発足に向けてプロ化を目指すということは、クラブのスポンサーやお客さんを増やして収益化するというんですけど、お金を集めるためにはクラブとしての軸、共感してもらえるストーリーが絶対必要だと思ったので、その土台となる「ロジックモデル」を1年間ぐらいかけて創りました。

そのモデルの骨子は3つです。つまり、WEリーグを目指す以上、このクラブは3つのエンパワメントを掲げると宣言したんです。その一つ目が「女性アスリートの心身の健康」。サッカーに限らず、だいたい女性アスリートの4割が月経異常を経験しているんです。さらには無月経が何カ月も続いて将来の妊娠に影響が出るとか、骨粗鬆症、栄養が足りないとか。これら3つを「女性アスリートの三主徴」と言うんですけど、女性アスリートが実はこんなに心身にいろんな課題を抱えてるという認識

を、まずは中心にしよう。ただ単にチームが強くなる、選手がプロになるのではなくて、女性アスリートがより健康に、安心安全に戦うには何が必要か。そこには心のケアも含まれて、多様なジェンダーを内包している選手たちでもサッカー続けていける環境づくりを第一に掲げました。

素晴らしい理念だと思います。2つ目以降についても教えてください。

2番目は、日本だと7歳から14歳にかけて、女子児童・生徒がどんどんスポーツをやめちゃうんです。サッカーだけで見ても、小学校から中学校に上がるタイミングで2割から3割。やめる理由がポジティブならいいですよ、例えばピアノががんばろうとか勉強ががんばろうとか。でも実はそうじゃない理由がいっぱいある。活動する場所がないとか、男性指導者のパワハラやセクハラがひどいとか。あとは「女の子がサッカー？」みたいな社会的なプレッシャーとか。そこに向き合おうというのが、2つ目ですね。

3つ目は、日本のビジネスにおいて、生理痛をはじめとする月経随伴症状による経済損失は年間4,900億円に上るという試算（経済産業省2024）があります。女子サッカーの事例を参考に、男性社員が女性の身体的特徴に関する正確な知識を身につける。あるいは女性の仕事におけるパフォーマンスを最大化するために我々の知見を参考にしてもらい、健康経営を加速させる。

これら「女性アスリートの心身の健康」「7歳から14歳の女子のスポーツ参加促進」「働く女性のパフォーマンス向上」の3つの指針それぞれについて、インパクト指標を設け、共感する団体にスポンサーになってもらうという活動が最初やったことです。

それらのビジョンの下、実現された成果の一端をご紹介いただけますか？

それぞれ具体例を挙げると、最初の「女性アスリートの心身の健康」については、実際に女性アスリートの前十字靱帯の断裂は男子の3倍というデータがある。その原因は様々な議論があるけど、選手たちの主観的な訴えの中には、生理前に緩みやすいとか、生理中に切りやすいという話もある。その中で仮説を設けて、エビデンスベースで検証していこうという試みを、DNPさんや大広さんと共に始めました。これは私もつけてるんですけど、SOXAI（ソクサイ）というリングです。オフザピッチではSOXAIで睡眠とかバイタル（脈拍・血圧・体温など）、ガミンの体組成計で身体データ、オンザピッチはKnowsのGPSでパフォーマンスを取りはじめています。

それから今年からスポンサーについてくださったネクイノさんは、smaluna（スマルナ）というオンラインピルの処方サービスをやっている会社さんです。低用量ピルで月経周期をコントロールするのは諸外国じゃ当たり前なんだけど、日本だと「ピル=避妊薬」みたいなイメージなので、そのイメージをまず変えなきゃいけない。これまでは婦人科じゃなきゃ処方してもらえず、日々忙しいアスリートが婦人科に行くのも難しかったし心理的なハードルも高かった。それが薬事法の改正によりオンライン診療も可能になったことで実現したパートナーシップです。選

手たちもすでに利用を開始していて大変助かっています。

フェムテック（※女性の健康課題を解決するテクノロジー）という言葉だけは聞いたことがありましたが、ここまでDXが進んでいるとは知りませんでした。

2番目の「7歳から14歳の女子のスポーツ参加促進」については、2年前から大坂なおみさんのファンド（プレー・アカデミーwith大坂なおみ）から補助金をいただいて進めています。私も娘が2人いるので共感できるのですが、世界的なトップアスリートである彼女自身、昨年娘さんを出産したことから、女の子が活発にスポーツを続けられる環境づくりに以前にも増して熱心です。我々のプロジェクトは「Girls Empowerment Project」と言って、サッカーを教える、ということではなくて、スポーツを通じて彼女たちの自己効力感を高めていく。大和シルフィードの選手たちと一緒に身体を動かして、ワークショップをやって、将来の夢や、自分の好きなことをみんなで共有することで、「自分にもできる」と思ってもらう。そんな活動を進めています。

そして3つめの「働く女性のパフォーマンス向上」については、シルフィードの監督・選手たちとスポンサー企業に出向く対話型のイベントを実施しています。他でもよくあるのが産婦人科の先生を招いたセミナーですが、それだと聞いて終わりというケースが多い。その点、スポーツチームというのはすごく良く、選手たちの月経周期と試合が重なったらどうしようとか、男性監督とどうコミュニケーションを取っているとか、そういう実際の困り事を共有できるから、企業側も具体的にイメージしやすく対策も取りやすいメリットがあるんです。例えば、試合ユニフォームのパンツが白だと気になるから黒に替えてほしいという要望を採用した事例など。

潜在化している課題が、スポーツだと端的に顕在化できるという点、とても納得です。

3. 女子サッカーの未来

さいごに、今後の展望についてお聞かせ願えますか？

身近なところでいうと、女子サッカーの普及に関しては日本中のサッカークラブ同士がもっと手を携えてもいいと思っています。例えば女子でキーパーをやりたい子ってすごく少ないんですよ。ただでさえ少ないのに取り合っても仕方がない。クラブ同士で連携して女性キーパーを増やす取り組みをやった方が建設的です。

ベルマーレは女子のトップチームは持っていませんが、U-15、U-18のチームはあって、今年U-18を卒業した選手がシルフィードに2人入ってくれたのは良い提携の事例でした。今後は、多くの男子クラブも女子クラブと連携したり、もしくは自クラブで女子チーム



湘南ベルマーレU-18 ガールズから大和シルフィードに新加入した相原結衣選手（左）と佐々木優芽選手（右）

をもつ流れが出てくると思います。

それはなぜですか？

ヨーロッパでは女子サッカーに9万人が駆け付ける試合もあるんですよ（2022年4月22日カンブ・ノウで行われた女子サッカー欧州チャンピオンズリーグ準々決勝FCバルセロナ×レアル・マドリードは観客動員数91,553人を記録）。ヨーロッパはSDGsやESG投資（※利益至上主義ではなく、「環境」「社会」「ガバナンス」に優れた企業を投資対象とすること）に積極的ですが、男性スポーツしかスポンサーしない企業は投資対象からは外すとかやるわけです。そうすると投資家からの外圧で、否が応でも女性スポーツを支援せざるを得なくなる。行政もそうですね。国によっては女子サッカーを応援している企業の税制を優遇するとか、政府レベルのレギュレーションにまでかわってくる。

企業サイドからすると最初は嫌々だったかもしれない。でも政府の後ろ盾や投資的なチャンスからお金が集まって、良い選手が集まって、試合の価値自体も上がるという好循環が生まれた。さらに興味深いのは、ヨーロッパやアメリカにおける女子サッカーの観客の中でその多くが女性なんです。つまり、フットボールビジネスの新しい市場の開拓にも成功している。ヨーロッパだけでなく、いずれ女子チームを持っていないとこの大会は出場できない、といったレギュレーションも出てくるかもしれない。

はるか先を見越して活動されているんですね。

昨年、ベルマーレのJリーグ加盟30周年を記念して、ホームタウン在住の高校生以下の子ども10,000人を国立競技場に招待する「こどもゆめチケット」を実施しました（2023年9月24日vs川崎フロンターレ）。そこに募集人数を遥かに上回るたくさんの応募をいただき、最終的にはクラブ記録となる約54,243人が詰めかけてくれた。湘南地区全体をホームタウンにしているポテンシャルを思い知らされました。

1万人の子どもたちの中には当然女の子もいて、彼女たちが女性アスリートや、働く女性になる過程の中では、きっと様々な課題に直面するはずですよ。そういった課題と一緒に一つ一つ越えていくことそのものを企業のCSV（Creating Shared Value: 共通価値の創造）として提案していきたいですね。それこそがロサンゼルスオリンピックのピーター・ユベロス（大会組織委員長を務めた実業家）が作ったビジネスモデルをいつか越えていくための第一歩だと信じています。

先見の明と、果敢なチャレンジ精神をお持ちの大多和さんなら、湘南を起点にイノベーションの輪を広げてくれるに違いないと確信しました。本日は貴重なお話をありがとうございました。

02

様々な視点で楽しむ好奇心



Vリーガー（プロバレーボール選手）として活躍したのち、本学情報マネジメント学部に入學した若松歩実さんに、そのキャリアについてお話を伺いました。

インタビュー・文：情報マネジメント学部 教授 椎野 睦

若松さんのバレーボールキャリアについておしえてください。

小学5年生になる前の10歳の時に「人数が足りないから試合に出てほしい」という友人からの誘いから始まり、小学校・中学校・高校・社会人と約10年間バレーボールを続け、20歳の頃に退団しました。

小学生・中学生の頃は強いチームとかではなく、地元のクラブや学校に通い、成績としては中学3年生の時は県大会で1度優勝、関東大会に出場もしました。また小学生の時は地域選抜、中学生の時はJOC (Junior Olympic Cup) という県選抜のキャプテンを担当しました。高校は大和南高校に通い3年間インターハイや春の高校バレーに出場し、コートに立ちました。高校3年生の時に埼玉上尾メディックスさんから声をかけて頂き、高校卒業後に入団し約2年間プレーをして20歳の時に退団しました。

始めた頃は自分の身長も活かして楽しそうという軽い気持ちから始め、高校の進路を決める際にバレーボールをやめて違うことをしようと考えた時もありました。しかしもう少し自分を試してみよう、もう少し頑張ろう、やるなら強豪の高校に挑戦してもっと自分を成長させようと強豪校へ入学し、気づいたら社会人でも続けていました。ただ楽しむことから真剣に楽しむ競技

生活に変わり毎日バレーボールのことで頭がいっぱいの日々を送っていました。

社会人チームをやめた理由について教えてください。

バレーボールだけではなく、もっと様々なことを経験して人として成長したいという考えが強くなり退団を決断しました。

試合に出られない期間が続く中で今後のことを考えることが多くなりました。ユニフォームを着る機会が少ないまま後何年間か続けたとして、もう少し歳を重ねて引退してから自分はどのようなのか。もし30歳手前で引退するとしてバレーボールしかやってなくて「バレーボールのこと以外は何もわからない」という状態を想像した時にもっと今のうちに様々な経験をして自分の幅を広げたいと考えるようになりました。大学に行ってもっと色んな考え方を身に付け、いつか海外留学にも挑戦してもっとバレー以外の様々なことを経験し、自分を成長させて幅を広げたいという考えが強くなりました。

女性として、アスリートとして、苦勞してきたことがあれば教えてください。

私自身、女性アスリートであることで苦勞したことはないと思



います。私が苦労したこととしては、自分自身のメンタルのコントロールに1番苦労したと思います。高校卒業後に入団し、18歳とまだ若く実力も追いついていなかったためユニフォームを着る機会が減りました。さらにリーグ中の練習はどうしてもレギュラー中心の練習になるため、なかなか自分の練習が出来ないことが多かったです。もどかしい気持ちになり、モチベーションを保つことが難しかったです。その時寮で1人暮らしをし、相談したり弱音を吐ける人が周りにいなくて精神的に落ちてしまい毎日号泣していた時期もありました。

どのように乗り越えてきましたか？若松さんが実践してきたコツや秘訣について教えてください。

1番は家族や周りの方のサポートに支えられて何とか乗り越えられたと思います。2年目に入った頃からやっと周りの先輩方ともコミュニケーションを取れるようになってきました。その頃から少しずつ弱音を口にするようになり上手く周りを頼れるようになったことが大きいと思います。

その他に何か1つ挙げるとしたら「考え方を変えて肩の力を抜くようにしていた」と思います。同じポジションに私よりも良い選手がいっぱいいる中でレギュラーを取ることはとても難しい状況でした。初めの頃は自分が試合に出て活躍することで頭がいっぱいになり、試合に出られない日や自分の練習が出来ない日が続きもどかしくなり、苦しくなり、精神的に落ちていくという悪循環でした。そんな日々が続く中、ベンチ外で試合を見ながら「もし自分だけが活躍したとしてもただの自己満足。チームが勝つことが何よりも大切であり、自分の成績にも繋がるな。」とふと思い、それが腑に落ちてスッと肩の力が抜けたような気がします。その日からレギュラーになってコートに立つことにこだわらず、チームが勝つために自分が出来ることは何か、ユニフォームを着ることが出来る試合では何を求められているのかと柔軟に考えられるようになった気がします。それからベンチ外であってもボトルの補充や荷物運びなど、とにかくコートに立つ選手が試合に専念できるようにサポートし、ユニフォームを着られる時は求められているものを考えて練習に取り組むようになりました。プレーも少しずつ伸び伸び出来るようになり、短くはありますがアスリート生活に上手く向き合えるようになったと思います。

頑張ることももちろん大切ではありますが、自分は視野が狭くなり苦しくなってしまうため、誰かに少し弱音を吐いたり、完璧主義になり過ぎず「まあいっか」と心の中で唱えたり、頑張り

すぎず肩の力を適度に抜くことも大切だなとこの経験を通じてとても感じました。

引退後は、なぜ産業能率大学への進学を決意したのでしょうか？

アクティブラーニングとグループワークを多く取り入れているところに惹かれて進学を決意しました。座学で学ぶよりも実践的に学びたいという考えがあり、様々な大学を調べていく中で、産業能率大学は他の企業さんとコラボしてプロジェクトを行っていたり、グループワークを多く取り入れている、実践的に学べる環境が良いなと思いました。

また私は今までバレーボール中心の生活をしていたため、もっとバレーボール以外の様々な考え方を身に付けて視野を広げたいという考えがありました。産業能率大学はグループワークが多い様々の方と会話をすることで、自分の考え方や視野を広げることが出来るのではないかなと思いました。また産業能率大学の卒業生である中学校の時の先輩に産業能率大学のことを伺ったことがあり、その時に心理学のゼミと椎野先生のご存在を教えてくださいました。元々私自身心理学にも興味があったため、実践的な環境とさらに学んでみたかった心理学も本格的に学べるという環境に惹かれて進学を決めました。

これからどのようなキャリア計画（夢や目標）をもっていますか？

具体的な計画はありませんが、カナダへの留学経験から海外に挑戦したいと思うようになりました。人と関わるのが好きで、様々な文化や価値観を持っている人と接することに興味があります。そして、どんな仕事に就いたとしても、仕事で出会った人たちが私のことを何年経っても「あの人（若松さん）元氣かな？」と思い出してもらえるような、そんな「誰かの記憶の中に生きることができる人」になれたらいいな、と思います。

さいごにバレーボールをやっている10代の若者たちに一言お願いします。

バレーボールは素晴らしいスポーツです。ですが、バレーボールに限らず何事にも挑戦して楽しんで欲しいです。バレーボールだけが全てではないですし、バレーボールから離れてみると新たな発見もあります。その発見がプレーに活かされることもあれば、今後の人生に役に立つこともあると思います。なので、様々な視点を持つこと、そして様々なことに興味を持って楽しんで挑戦して欲しいです。



03

大学選手権2連覇を達成して —女性アスリートとしてのこれまでとこれから—



2022年と2023年のビーチバレー大学選手権において2連覇を飾った伊藤桜さん（本学2024年卒、日本通運（株））と野口彩陽さん（本学2024年卒、湘南RIGASSOビーチバレーボールクラブ）にペアとして成長できた要因と女性アスリートとしてのこれからのビジョンについて語っていただきました。

インタビュー・文：情報マネジメント学部 教授 中川 直樹

1.二人で乗り越えた壁

改めて大学選手権2連覇おめでとうございます。

これまでの女子ビーチバレー部の歴史において、同学年のペアでの連覇は初めてと聞いていますが2連覇できた要因はなんだったと思いますか？

伊藤（さくら）：

大学生のレベルに合わせて練習しなかったことに尽きると思います。私達は大学で練習をしていましたが、それ以上に外部に出ているような選手とペアを組んで試合に出場する中で、経験を積んだり様々な情報を頂いたりしながら、自分達に必要と思えることを取り入れてみたりすることができたので、他の学生選手とはかなり違った場面があったので2連覇できたんじゃないかなというの思ってます。

では野口さんはどう考えていますか？

野口（さや）：ほぼ同じかなと思います。

格上のプロの選手と戦い続ける中で、お互いを高め合えた部分というのはありましたか？

伊藤：役割分担ははっきりしていたと思います。

コミュニケーションもそうですし、技術の面での役割分担はお互いしっかりできていたと思います。お互いがモチベーションを理解していましたし、お互いの良さを出すってところではいろいろと会話して考えて、高め合うことができていたんじゃないかなと思います

野口：私はさくらに引っ張ってもらいましたね。高め合ったっていうよりは、さくらが上げてくれたっていう方があってるのかも。4年生になる前は結構さくらと実力の差があるなって。自分の中で勝ちたい気持ちがない訳ではないのですが、さくらの考えてることに追いついていけない自分がいてそれが結構悔しくて。これじゃダメだなと思ってブラジル行ったりしたんですけど。

伊藤さんからすると野口さんに高いものを求めたなっていう思いはあるのですか？

伊藤：高いものというか。初めは自分が勝つためには必要だと思ってたことをペアに強要してました。当時はすごい考えが幼かったのも、その人の性格を受け入れられないというか、その人はその人って割り切れなかったんです。こうじゃなきゃダメっていうのが自分の中であつたので、強い人はこうだからこうしなきゃいけないとか、勝つためにはこうしなきゃいけないっていうのをただただ伝えてたみたいな感じで。だから高いものを求めてたっていうか自分が思ってることをバンバン言っていました。でも今思えば、それを聞いてくれる人がいないと成り立たないと思います。

でも野口さんは何とか応えたい部分があつたということでしたので、もしかしたらこの二人じゃなかったら、2連覇はできなかったのかつたのかもしれないですね。一步間違えれば、伊藤さんの要求についていけなくて、空中分解する可能性もあつたってことでしょうか？

野口：なかったわけじゃないです。

二人でプレイする間にもいくつかの壁にぶつかる時があつたと思うのですが、それをどう乗り越えてきたのですか？

伊藤：自分はプレイというよりかはそのペアと接することについてなんですけど。さやがブラジル行ってる間とかもいろんな選手と練習させてもらい、いろんな選手、特に年上の選手とペア組んで試合に出場しました。自分が年下という立場で試合に臨むと、年上の選手の声掛けや、振る舞いに助けられながらのびのびできて、とてもやりやすく感じました。自分だったらこう言ってるだろうという場面でも、違った角度からの声掛けをもらい、自分が結構いい気持ちになることがあり、相手にもこうやって接すればいいんだなっていうことが学べました。さやとのチームでは自分がゲームメイクする役割だったので、今までの自分とは違った伝え方を学べたのは、自分の中では結構大きなポイントでした。

野口さんはどうですか？

野口：今さくらが言ってたのとほぼ一緒なんですけど、ずっと同じペアでやっていると、気づけなくなることが出て来ると思うので、1回離れて違う人とやったりとか違う環境でやったりしたことで新しい気づきがで良かったと思います。ブラジルでコミュニケーションをとるのはすごい難しかったので、日本語同士で普通にしゃべって伝わる会話でコミュニケーションをとることがすごい大事だなっていうことにも気づきました。また、さくらと組んでいる時の有難

みとかですね。さくらならこういう時にこうしてくれるだろうとか、こうしてるんだろうとかを考えられたので、1回離れることで改めてさくらの存在の大きさに気づくことができました。と同時に、自分の今までのさくらに対する態度とかもちょっと見直すことができ、考えてくれた戦略をいかに実現できるかとかを考えたりすることができました。

お互いが離れてプレイした時間が重要な意味を持ったんですね。

2.女性アスリートとして見たビーチバレー

では、2つ目のテーマに話題を切り換えます。

日本は様々な環境において男性と女性の格差、いわゆるジェンダーギャップがあり、日本が浮上するためには女性がより活躍できるような社会を作っていくことが重要だと言われていきます。スポーツ界においても、やはりジェンダーギャップがまだまだ払拭しきれていないことが指摘されています。そこで、お二人から、ジェンダーギャップを縮めるヒントが聞き出せればと思います。まずはそのお二人が女性アスリートとしてビーチバレーをどう見ているかを聞かせて下さい。

伊藤：女子の露出が高いと思います。(笑)

女子選手の露出度の高いユニフォームによって注目が集まるというのが少し関係してるんじゃないかなって思います。

では野口さんどうですか？

野口：女性でビーチバレーをやりたいっていう人はあまりいないんじゃないかなと思っています。それはさくらが言ったユニフォームの露出とか、日焼けのこととか、あと夏の暑い日の砂の上でのプレイは疲れそうだからという理由で、本気でやるスポーツとして捉えられないのではないのかなって思います。

では逆にその女性アスリートとして考えるビーチバレーの良い点とは何ですか？

伊藤：女性としていうのは難しい質問ですが、ビーチバレーは観客の近くで行うスポーツなので、声援とかが聞こえたり、試合後話しかけられたりするのでとても外向的な感じがします。また、試合中のコートチェンジの時とかタッチしたりするし、選手同士の関わりが結構あるんじゃないかなって思います。さらに、週末だけ海行ってビーチバレーするって人でも、そこで出会った人たちでプレイするうちに仲良くなったりとかするので、関わりは多いんじゃないかなって思います。

コートチェンジでのタッチは男子選手も行うのですか？

伊藤：やりますね

タッチの場面を見ていると男性はあっさりしてる感じが、そして女性はお互いをリスペクトする気持ちが強く感じ取れるように思ったりしますが。

伊藤：男性は闘志剥き出してイメージなんですけど、女性は心の中ではかなり悔しかったりしても楽しさを重視して明るく自分を作るのが上手いと思います。

3.女性にスポーツを普及させるために必要なこと

なるほど。ありがとうございます。

では次に、女性のスポーツを今後普及させるために必要なことについて野口さんの考えをお聞きできればと思います。

野口：何だろう子供のチャンスを大人が奪ってしまう場面があるように思いますね。

大人の考えや先入観、例えば女の子だからそんな危ないことはやらせられないとか、そこまでやらなくてもみたいに考えてる人が子供のチャンスを奪っているように感じる場合があります。女の子だからみたいな固定観念がまだ根強くあるのかもしれませんが。その大人の考え方を変えていくことが一つのきっかけとなるかもしれません。

それでは最後の質問です。

お二人がこれからも競技者として活躍することが女性活躍社会とどのように関連すると考えていますか？

伊藤：女性はやはり母親になるケースが多くて。そうなると仕事をしたり育児をしたりで自分が好きなことをしたりす

る時間ってすごい減ったりすると思うんですけど、ビーチバレーは30歳を超えても続けられるスポーツだと思うので、私が30歳を超えても頑張り続けることで、なんか今まで家事中心の生活だったから、外に出てスポーツをやってみようとか、誰か誘ってやろうというきっかけになれたらいいなというのはちょっと思いますね。私がやりたいことをやれているということが特別なことではなく、いろいろな人がそういうことができるようになるといいと思います。

逆に言うとお伊藤さんから見るとやりたいことをやれない女性もまだまだいるなって思ってるって事でしょうか。

伊藤：そう思います。

自分はスポーツを続ける母親の姿を追いかけてきたところもあるので、お母さんがスポーツをやっていると娘がその姿を見てスポーツに取り組むんじゃないかなって私は思います。

野口：私が卒業後に関わるチームでは、小中学生対象のクラブチームも作るという検討をしていると聞いています。そうなった場合、私も教える側の立場に立ったりとか年下の子達の面倒をみたりする場面が出て来ると思うので、女性という立場から、またビーチのボールを打ちたいとか、また私と会いたいなと思ってくれる子を増やして地域のスポーツ振興に貢献できたらいいかなと思います。

今日は、ビーチバレーを通じてのお二人の成長過程と女性アスリート目線からの今後のビーチバレーとの関わり方についてお話を聞かせて頂きありがとうございました。卒業してからのお二人の活躍を楽しみにしています。頑張ってください。



大学運動部サポートプログラム： 第7期リーダーシップ養成プログラムの実施報告

経営学部 教授 齊藤 弘通

本学スポーツマネジメント研究所では、本学運動部員のキャリア形成や人間的成長を支援するためのサポートプログラムを展開し、本稿で述べる「リーダーシップ養成プログラム」もその1つとして位置づけられている。

本稿では、2023年度、大学運動部特別強化クラブ部員に対して実施した「第7期リーダーシップ養成プログラム」の概要と今後の課題を述べる。

1. 2023年度の実施概要

筆者は、本学運動部員を対象とした「リーダーシップ養成プログラム」の企画および講師を2017年度より担当している。2023年度も大学の特別強化クラブであるサッカー部、女子ビーチバレー部、野球部から選抜されたメンバー11名（2年生10名・1年生1名）を迎え、2023年11月から12月にかけて全5回のプログラム（1回100分）をオンラインで実施した。

第1回目はリーダーシップの本質について解説したのち、リーダーシップを発揮するために必要な24のコンピテンシーについて自己診断を行った。第2回目からはリーダーシップを発揮するために必要な思考の方法や行動の仕方について、ケーススタディやロールプレイなどを通して学習した。具体的には、メンバーへのロジカルな指示の出し方やクラブの抱える問題を解決する思考プロセス、チームミーティングにおける効果的なファシリテーションの方法、メンバーの動機付けの方法、メンバーのソーシャルスタイルに応じた働きかけの方法、リーダーとして自身の主体性を高める方法、シェアード・リーダーシップの考え方などを学習した。

また、2023年度の「リーダーシップ養成プログラム」では、プログラム終了後も、学生が学んだことを適宜振り返れるよう、筆者が執筆した『リーダーシップ・ハンドブック』を学生たちに配布した。



リーダーシップ・ハンドブック

2. 2023年度「第7期リーダーシップ養成プログラム」の振り返り

この「リーダーシップ養成プログラム」は、リーダーシップを発揮するための各種知識・スキルを学ぶだけでなく、クラブチームでの問題解決の取り組みや大学の授業、ゼミでのチーム活動など、実際の活動場面においてリーダーシップを発揮することや活動の中で自身のリーダーシップを振り返り、気づきを言語化することを求めている。

チームによる問題解決活動の振り返り

2023年度も、リーダーシップを発揮する機会として、各運動部の中で問題になっている事象を1つとりあげ、その解決策を考え、実行するチーム活動に取り組んでもらった。各クラブの取り上げた問題事象は、「目標が明確になっていない人が多い」（女子ビーチバレー部）、「備品管理がしっかりとしていない」「上下関係がなさすぎる」「部員の向いている方向が同じでない」（サッカー部）、「後輩の出席率が低い」（野球部）といったも

のであった。チーム活動ではこうした問題の原因を探り、具体的な問題解決策を検討してもらった。このチームによる問題解決活動は学生に様々な気づきを与えているようである。以下、学生の代表的な感想を抜粋の上、紹介する。

- 今回のリーダーシッププログラムでは、実際に具体的な自分たちのクラブの問題を明確にし、原因・課題、そして解決策を言葉にして発表した。実際に言葉にして課題と向き合うということはできていなかったの、良い時間になったと思う。今回一から考えて発表したことで、次自分が部長になった時にどのような部分を課題にしてどこに気を付けて活動すればよいのか、明確になった。
- 今回は最初に、それぞれのグループで考えてきた各クラブの問題について考え、解決策までを考える発表を聞いたが、みんなとても具体的に学ぶことが多かった。特に、野球部とビーチバレー部の問題がサッカー部と全く違うもので、それに対するアプローチの仕方がとても興味深かった。
- 同じ部活の選手でも、自分たちのグループで出した問題とは違った視点の問題を出していた。いろんな視点があるからこそ、一つの目標を達成する難しさを再確認できた。また違った強化指定の部活の選手を聞くことで新しい問題解決の仕方を見ることができた。野球部は全国大会出場まである大きなリーグに参加しているにもかかわらず熱量の差があるとあげていた。それは規模が小さいからなのか？大きく仕切ってくれるひとがいらないからなのか？いろいろ考えさせられた。サッカー部の別のグループがあげた「上下関係がなさすぎる」という問題が新しい視点で驚きが大きかった。口調ではなく、態度であったり、リスペクトが足りていなかったり、という話は共感した。先輩である自分たちに、後輩からリスペクトを送ってもらえるような態度を自分たちはとっているのか今一度確認しようと思った。

こうした学生の感想からは、チームによる問題解決活動を通して、クラブの問題を自分ごととして捉えるようになったり、同じ特別強化クラブでも抱えている問題事象や問題解決に向けたアプローチに違いがあることに気づいたりしている様子が感じられる。

「リーダーシップ養成プログラム」からの学生の気づき

「リーダーシップ養成プログラム」では、各回のプログラムでの演習や上記の問題解決活動の後、自身のリーダーシップを振り返り、気づいたことや今後の課題を言葉化させている。以下の2名の学生の感想を紹介し、5回のプログラムを通して、どのような気づきがあったのかを確認する。

- この授業を通して、私はリーダーとしてあるべき考え方などを学ぶことができた。みんなをまとめる時にどのような話し方をすると聞き手が聴きやすいと感じるか、というような部分も学習することができた。サッカー部と野球部の人たちと一緒に授業を受けたが、どの部活

も様々な問題を抱えていた。その問題をどのように解決するかということをしっかりと考えていた。また、毎週毎週自分の課題を決めてその課題をどのくらいできて、逆にどの部分ができていないのかという細かい改善方法なども考えた。考えるだけで言葉にすることができなければリーダーとしては成り立たない。成り立たせるためにも、しっかりと言葉にして自分の頭の中の考えを話すことができるように少しは成長できたと思う。授業が終わったからと言って自分の中での一週間の目標をなくすのではなく、自分の中でしっかりと考えて判断してその後の来週の改善点まで考えることをしていれば、授業がなくても自分で成長することができると思う。自分がキャプテンになるまではあと半年あるので、その間でもっともっと自分のリーダーとしてのレベルを上げていきたいと思う。

「リーダーシップ養成プログラム」では、リーダーシップを発揮する24のコンピテンシーの中から、毎週、どの項目を意識して1週間活動をするかを決めさせ、翌週、その実践状況を振り返らせている。

「授業が終わったからと言って自分の中での一週間の目標をなくすのではなく、自分の中でしっかりと考えて判断してその後の来週の改善点まで考えることをしていれば、授業がなくても自分で成長することができると思う」というこの学生の感想からは、学生がプログラムの受講を通して、毎週目標を定め、日々の活動の中でリーダーシップを発揮することが自信の成長につながることに気付いた様子が見えがえる。

● 今回のリーダーシップ講習会に野球部の代表として参加させていただき、本当にためになるお話を聞くことが出来ました。特に、リーダーとして周りから信頼してもらう方法、周りを説得させられる話し方など非常に勉強になりました。私は母校の高校の野球部で学生コーチをしています。その際にいかに選手に自分の話を聞き入れてもらえるかということをずっと考えていました。今教えている選手たちは自分が現役だった頃は知らないで、どうしたら話の中に説得力をもたせることができるかが自分の中で課題だと思っていました。そのなかで今回のリーダーシップ講習会を受講し、とにかく相手のことを否定しないことの大切さを学びました。自分がコーチをしている時に、おかしき動きやプレーをしていると「お前何をやっているんだ」とすぐ否定してしまいます。なので、今後はまず選手に「どういう考えで今のプレーをした？」とまずは相手の考えを聞いてから、今のプレーはこうすると良くなるんじゃない？と提案したり、逆にどうすればよかったと思う？と選手に考えさせるように指導法を変えました。そうすると選手の考えを聞くことができるので、おかしき動きやプレーの根源を知ることができ、根本的な課題の解決ができるようになりました。今後も大学の野球部での活動はもちろんのこと、母校の指導にも今回学んだ事をいかし、少しでも選手の上達の手助けが出来ればと思います。

「どういう考えで今のプレーをした？」とまずは相手の考えを聞いてから、今のプレーはこうすると良くなるんじゃない？と提案したり、逆にどうすればよかったと思う？と選手に考えさせるように指導法を変えました。」という、この学生の感想からは、コーチとして相手を否定しないことの大切さや、選手に考えさせる問いかけ（発問）がいかに大切であるかに気づいたことがうかがえる。

このように、各回のプログラムを通して学生はリーダーシップの発揮について様々な気づきを得つつ、自身のクラブ活動で学んだことをどう活かしていくかを考え、実践を試みているようである。

3.2023年度の取り組み：「シェアド・リーダーシップ」の解説動画の制作

最後に、2023年度に新規に開発した教材について紹介す

る。筆者はこれまで「リーダーシップ養成プログラム」で活用することを主な目的に、リーダーシップを発揮するためにとるべき行動やスキルについて学ぶ様々な映像教材を開発してきた。2023年度も次年度のプログラムに活かすべく、新たに「シェアド・リーダーシップ」の考え方や具体的な方法を解説した講義動画を制作した。



シェアド・リーダーシップの解説動画

「シェアド・リーダーシップ」とは、チームの中でリーダーシップがシェアされている状態、具体的には、チーム活動の各局面において、メンバー個々人がその強みやその人ならではの特性を発揮し、皆がリーダーとしてリーダーシップを発揮しつつ、皆がフォロワーとしてフォロワーシップを発揮するチーム状態を指す概念であり、今日注目されているリーダーシップ理論の1つである。多くのリーダーシップ理論が、チームの中で特定の人だけがリーダーシップを発揮することを前提とし、リーダーシップをリーダー個人に帰属する特性とみなしているのに対して、「シェアド・リーダーシップ」は、チームの中にいる複数のメンバーまたは全員でリーダーシップを発揮することを前提としている点で大変ユニークな新しいリーダーシップの考え方である。

リーダーシップというと、チームの中の特定の誰かがその他のメンバーを指揮したり、引っ張ったりしていくイメージがある。しかし実際、チームで成果を出していく際には、特定の人だけがリーダーシップを発揮するのではなく、活動の局面ごとに、その場面で必要な能力を持った人が活躍し、チームを引っ張っているケースが多い。このように、チームが機能するためには、特定の誰か一人がリーダーシップを発揮するのではなく、その都度有効なリーダーシップを、その状況においてふさわしいメンバーが発揮する状態を作ることが大切である。こうしたチーム活動の各局面において、メンバー個々人がその強みやその人ならではの特性を発揮し、皆がリーダーとしてリーダーシップを発揮しつつ、皆がフォロワーとしてフォロワーシップを発揮するチーム状態を作っていくというのが、「シェアド・リーダーシップ」の考え方である。

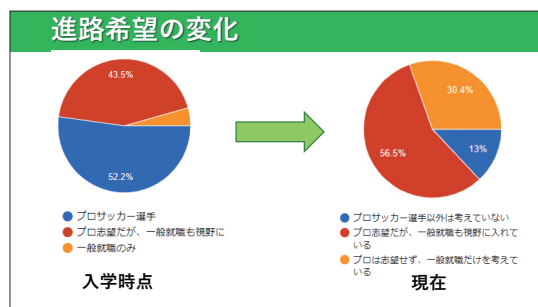
この「シェアド・リーダーシップ」の考え方は、効果的なチームを作っていくときに非常に有効な考え方と言え、本学の特別強化クラブの活動においても大いに参考になるものと考えられる。そこで、2023年度はこの「シェアド・リーダーシップ」の考え方を学生にわかりやすく伝えるための動画を制作したのである。

2024年度で「リーダーシップ養成プログラム」も8年目を迎える。上記で紹介した新規の映像教材も活用しながら、大学運動部においてリーダーとしての役割を担う学生にとってより有益な学習機会になるよう引き続きプログラムの運営に努めていきたい。プログラムに参加した学生の感想からは、多様な特別強化クラブのメンバーからの意見に気づきを得ている様子が見えがえることから、プログラムの運営においては今後も多様なメンバー構成を意識していきたい。

本研究所では、特別強化クラブであるサッカー部員を対象としたキャリアサポートプログラムを開講している。1年生を対象としたプログラムは、プロサッカー選手という存在やプロサッカー選手として求められる資質について考える内容である。それに対して、今回実施した3年生対象のプログラムは、これまで各自が歩んできたサッカーキャリアを振り返り、これからの進路について考える上でのヒントを提供する内容となっている。

1.夢から現実へ

毎年の新入部員約30名のほとんどは、将来はプロサッカー選手となることを夢見て入部するが、それから3年の時間が経過した大学3年生の12月には、これからの人生の進路と否応が無しに向かい合うタイミングを迎える。4年生となって、トップチームでの活躍が期待できると評価している部員はさらに夢の実現を目指す。評価の伴わない部員は進路の変更を決断しなければならない。しかしながら、これまで10年以上もの時間、プロサッカー選手となることを夢見てひたすらサッカーと向かい合ってきた彼らが、容易に進路変更を決断できないことも多い。そんな彼らは「一般企業で働いている自分をイメージすることができない」「何をやっていいのかわからない」「サッカーしかやってこなかったの自信が持てない」という言葉をよく口にする。



2.スポーツによって培われる人間力

内閣府によれば、社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力を人間力と定義しているが、特にアスリートと呼ばれる、レベルを問わず、スポーツでの勝利、タイムの更新を目指して本気でスポーツに取り組んでいる人は、この人間力に対して特別なポテンシャルを持っていると言われている。松本（2022）によれば、世界経済フォーラムが提出した「2022年に企業が求めるビジネススキルの調査レポート」（2018）に記載された上位10項目の能力のうち、

「分析的思考と革新」「アクティブラーニングと戦略的学習力」「創造性、独創性、イニシアティブ」「批判的思考と分析」「複雑な問題解決」「リーダーシップと社会的影響」は、アスリートが日々の努力の中で培われる能力と完全に一致することを指摘している。

3.競技成績によって変化する自己評価

これまでの先行研究によって、運動部員は加入していない個人と比べるとライフスキル（日常生活に生じるさまざまな問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処するために必要な能力。世界保健機構1997）が有意に高いレベルであることが報告されている（平井ら、2012、島本と石井、2009）。さらに、大学生のライフスキルの獲得は競技成績と正の相関関係があることが報告されており、競技レベルの高いアスリートほど望ましいライフスキルを有していることが報告されている（Murakami, K., et al., 2004）。Murakamiらが報告したように、競技レベルがライフスキル獲得に影響を及ぼすのであれば、サッカーのようなチームスポーツにおいて、例えば部内でのポジション（トップチームに所属しているか否か）やリーグ戦での成績が、部員のライフスキル（人間力）に関する自己評価に影響を及ぼす可能性を否定できない。亀谷ら（2021）は、大学サッカー部に所属する部員を対象に、競技成績がライフスキル獲得に及ぼす影響を調査している。調査対象となったA大学とB大学のサッカー部は、同じリーグに所属し、前期終了時点では順位はほぼ差がなかったが、B大学は後期に成績を伸ばし上位リーグに昇格を決め、一方のA大学は成績を下げ下位となり入れ替え戦で勝利し何とかリーグに残留した。そして、この成績と関連するように前期終了時には認められなかったライフスキルの獲得レベルが、シーズン終了時には有意にB大学の方が高くなっていたことを報告している。

ライフスキルは繰り返しの経験によって培われていくものであるが、自己肯定感の低下がライフスキル獲得レベルの評価を下

げる可能性を有していることをこの研究結果は示唆している。人生の選択を迫られる3年生の12月という時期に、多くの3年生がトップチームでの活躍という点からは不満足な結果となった現実が、「自分はサッカーしかやってこなかった」などという発言につながるのではないだろうか。

サッカーによって培われたライフスキルとは

- 長い時間をかけてサッカーに取り組んできたみなさんは、サッカーから学び、身につけることできた能力があると考えます。
- 最善の努力
- 礼儀マナー
- 考える力
- 勝敗の受容
- 責任ある行動
- 感謝と謙虚さ
- 目標設定
- コミュニケーション
- 体調管理
- ストレスマネジメント

(島本, 2008)

ライフスキルとは

- 日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力。
- 「生きる力」とはほぼ同義。経験を通じて獲得可能な後天的能力。

4.3年生部員対象キャリアサポートプログラムを実施

2023年12月22日(金)にサッカー部3年生を対象にキャリアサポートプログラム「サッカーと私-これまでとこれから-」を小野田研究員と共に実施した。プログラム前半は、1年次に参加したキャリアサポートプログラムにおいて提出したまとめのレポートに目を通したり、事前に回答してもらったこれまでの自分とサッカーの関わりに関するアンケート結果を解説したりして、自分の内面的変化を考察するきっかけを提供した。後半には、ライフスキルについての解説、アスリートがライフスキルを獲得する上で恵まれた環境にいることやこれまでの調査研究によりライフスキル獲得レベルが、運動部に所属していない大学生に比べ高くなる傾向にあること、そしてライフスキル獲得レベルの自己評価は競技成績に左右される可能性があることも説明した。最後には、アスリート人材を評価する企業からの情報について解説した。その後、改めて自分のモチエを自己評価した上で、今後のサッカーとの付き合い方や進路との向かい合い方についてグループワークを行った。

5.参加者からのコメント

以下に、アンケートにて回収した参加者からのコメントの一部を紹介する(原文ママ)。

- 今回の研修会を通して、一年の頃はプロサッカー選手だけを目標に頑張っていたが、現在はその現実というものを知り、社会人として働いていく選択肢を取ろうかと思っています。でも、実際にはプロサッカー選手になるというものを諦めたわけじゃないのに、現在就職活動をしているからか、自分の中で少し諦めている感が出てしまっていたので、一年生の頃の気持ちを思い出して、この産業能率大学に入学した意味を今一度理

解することができました。もし、社会人で一般企業に就職したとしても、サッカーで培ったスキルは今後も活かせるものがあり、サッカーしかやってこなかった人にしかない強みというものもあるので、その強みというものをしっかりと分析し、活かしていきたいと思いました。

- 今回の研修会を通して、2つのことを強く感じた。1つ目は、自分を見つめ直す機会になった。過去から現在を振り返り何をしてきたか。何をして何を学んだかを振り返ることができ、大学ではこういったことを身につけたなと実感することができた。これらを就活にも活かしていきたいと感じた。2つ目は、サッカー部という集団の難しさを感じた。いろんな考えや立場があって難しさを感じた。私自身もモチベーションを保つのが難しい時もあった。チームとして個人としてモチベーションを保つために来年度はより目標を明確化し、就活で追いやられてもサッカーという帰る道を見失わないようにしたいと感じた。
- 研修会に参加して感じたことは、今までの部活の経験を社会の場で活かすことができるということだ。サッカーだけやってきて、自分はサッカーしか取り柄がないと思っていたが、そんなことはなかった。部活でしか経験ができないことが社会の場でも通用することができた。この経験を生かしていきたいと思う。
- 改めて、サッカーを本気でやろうと思いました。私は幼い頃からプロサッカー選手という夢を叶える為に継続してきていますが、この夢はもう自分の夢だけではなく両親の願いでもあることを感じています。今回で、サッカーを通じてビジネスパーソンに活かせること、企業が体育会系を求める理由を理解しましたが、やっぱり自分はサッカーでキャリアを積みたいので、残りの1年間死に物狂いで夢を叶えたいと思います。

6.まとめ

今回のプログラム実施を通じて、キャリアトランジションを迎えるサッカー部員に対してサポートを行う重要性を再認識した。今後も効果のあるプログラムを提供できるように検討を重ねていきたい。

参考文献

1. 亀谷涼ら 大学サッカー競技を対象とした競技成績と学生のライフスキルの関係について-縦断調査からの検討-。スポーツ産業学研究(2021)
2. 島本好平ら アスリートに求められるライフスキルの評価-大学アスリートを対象とした尺度開発-。スポーツ心理学研究(2013)
3. 松本隆宏 アスリート人材。マネジメント社(2022)

産業能率大学情報マネジメント学部には「スポーツ・プロモーション」という横浜 DeNA ベイスターズとのコラボレーション授業がある。その授業では「産業能率大学スペシャルゲーム」と題したプロ野球イースタン・リーグ公式戦 1 試合を学生自らの手でマネジメントする。そこで 2023 年の産業能率大学スペシャルゲームでは、心理検査を活用したイベントブースの運営を通じて実践研究を行った。具体的には、ファン心理の分析を行うと共に、コミュニケーション能力の向上や人間理解の深化を目的とし、学生による心理検査(心の回復度としてのレジリエンス検査)とフィードバックとしてのコーチング面接を実践した。本稿では、その実践研究の取り組みと結果を報告する。

1. 経緯と背景

2023年7月8日に平塚球場(バッティングパレス相石スタジアムひらつか)では「産業能率大学スペシャルゲーム2023(横浜 DeNA ベイスターズ vs 千葉ロッテマリーンズ: イースタン・リーグ公式戦)」が開催された。本研究はこの産業能率大学スペシャルゲーム開催中のスタジアム内に「メンタルブース」と題したイベントブースを出展し、そこで実施された。

当日は新型コロナウィルスの猛威も未だ残っていたため、本研究は球場内コンコースに机とパーティションで設営されたブースを設置し、スタッフはマスクを着用して心理検査とフィードバック・コーチングを実施した(図1~4を参照)。

ブースのキャッチコピーは「満天一等星」であった。ここでは来場された方にレジリエンス(精神的健康状態に立ち直ろうとする力、またはそれを予防する力、心の回復力/復元力)を測定する心理検査を体験していただいた。そして、そこで得られた結果から専門のトレーニングを受けた学生がレジリエンス・コーチングを行うことで、来場された皆様の心の健康増進に貢献するブース(メンタルブース)を実施した。またコーチング終了時にはセルフケア増進を目的として作成した「回復の扉」と題したオリジナル冊子を配布した(図5~6を参照)。

2. 心理検査

本研究では「S-H式レジリエンス検査(Sukemune-Hiew Resilience Test)」を活用してレジリエンスの測定を行った。S-H式レジリエンス検査(以下、SHRT)は質問紙検査であり、パート1(3因子27項目)とパート2(2群8項目)に分かれているが(祐宗,2019)、本研究ではパート1のみを使用した。パート1の3因子は、A因子(ソーシャルサポート: 家族、友人、同僚などの周囲の人たちからの支援や協力などの度合い)、B因子(自己効力感: 問題解決をどの程度できるかなどの度合い)、C因子(社会性: 他者とのつき合いにおける親和性や協調性の度合い)の3因子から構成されている。

尚、本年度の産業能率大学スペシャルゲームが「横浜 DeNA ベイスターズ vs 千葉ロッテマリーンズ」ということもあり、両チームに共通するモチーフとして「星」が考えられたため(千葉ロッテマリーンズはかつて千葉ロッテオリオンズであった)、星をテーマにしたイベントブースを展開することとした。そこで、ブースのキャッチコピーを「満天一等星」とした。ブースを実施する上で、SHRTの3因子についてもイベント用のネーミングを行った。A因子(ソーシャルサポート)については「頼れる存在からの輝き支援力」と捉えて「惑星の輝き」とした。B因子(自己効力感)については「自分を磨き上げて輝く力」と捉えて「恒星の輝き」とし



図 1. 実施風景①



図 2. 実施風景②



図 3. 実施風景③



図 4. 実施風景④



図 5. 配布冊子(表紙)



図 6. 配布冊子(説明)

た。C因子（社会性）については「他者との協調や友情によって輝く力」と捉えて「星座の輝き」とした。

3. 結果

本研究は「スタンダードコース」と「ショートコース」を用意して実施した。ショートコースは3因子を主観的に100点満点で自己評価していただき、それに則してコーチングするというものであった。ショートコース開設の背景には、野球観戦中の合間に参加されることへの配慮や、10代以下の小学生もいることから開設した。本研究の分析対象となる以下のデータは「スタンダードコース」で得られたデータである。参加してくれた方は118名（男性65名、女性53名）であった。性別・年代ごとの参加者数は図7の通りであった。また性別による平均点の比較は図8の通りであり、性別ごとの標準平均点との比較は図8・図9の通りであった。

またSHRTは被験者2581名（男性980名、女性1601名）の先行研究から判定基準が設けられている（祐宗,2019）。それによると、男性の平均値は「ソーシャルサポート因子：47.5」「自己効力感：35.7」「社会性：17.7」「合計：100.8」とされている。そして女性の平均点は「ソーシャルサポート因子：51.1」「自己効力感：34.1」「社会性：18.1」「合計：103.4」とされている。

4. 考察

紙面の都合上簡潔に傾向をまとめると、まず参加者の傾向としては20代の男女が最も多く、参加者のほとんどが20代であった。これはスタンダードコースを希望する参加者は20代が多かったことによる偏りであることが伺われる。その背景には、スタンダードコースは20分程度時間を要するため、その時間的な拘束要因が強かったと推察される。

それぞれの平均点の性別による比較としては（図8）、社会性が同点であるが総じて女性が男性に比べて高いことが伺われた。

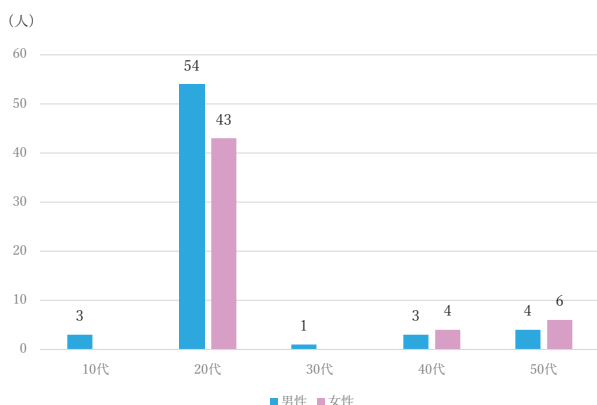


図7. 参加者の性別と年代

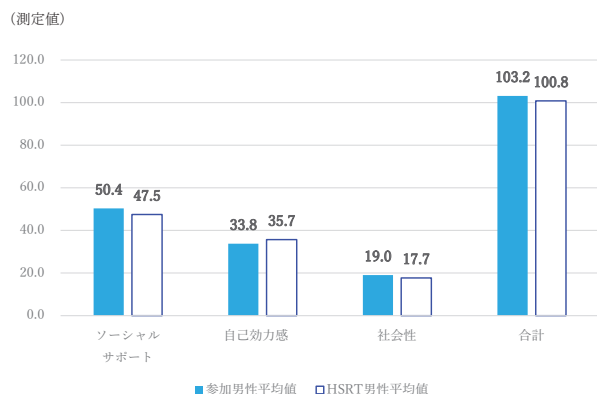


図9. レジリエンス得点（男性）

参加男性の標準平均点との比較からは（図9）、自己効力感以外はすべて標準平均値よりも高いことが伺われる。参加女性の標準平均点との比較からは（図10）、参加者の得点は標準得点よりもすべてが高いことが伺われる。

性別ごとにまとめると、まず来場されていた女性は総じてレジリエンスが高く、スポーツ観戦に来る女性たちの精神的健康度の高さが推察された。男性は、標準よりも総じて高いが、自己効力感は低さが伺われた。ここから、スポーツ観戦に来る男性来場者の自己効力感の向上に貢献するようなイベントやサービスは来場者の精神的健康に寄与するものとなる可能性が伺われる。

5. まとめ

本稿では、ボールパークにおける精神的健康度としてのレジリエンスを分析する心理検査とそのフィードバックとしてのコーチング面接を実施した。結果および考察に示されたとおり、本イベントに興味関心を示していただいた方は総じてレジリエンスが高いことが伺われたが、男性の自己効力感のみ低い傾向が伺われた。

近年は横浜DeNAベイスターズが提唱する「Community Ballpark Project」にあるように、来場者にとって野球場で野球観戦以外の付加価値をどのように構築するかが注目されている。本研究がスポーツビジネスの発展に微力でも貢献できれば幸甚である。

6. 引用文献

祐宗省三 2019 『S-H式レジリエンス検査 手引書』 竹井機器工業株式会社。

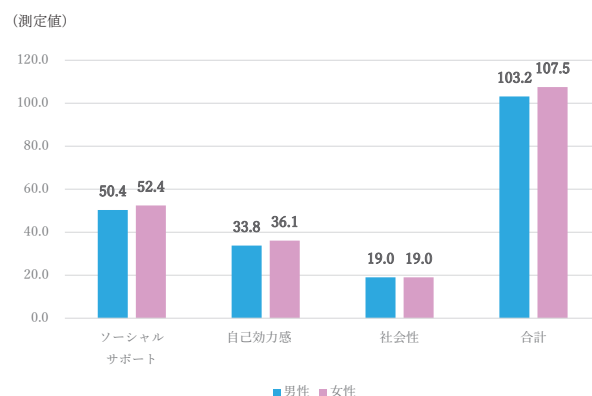


図8. レジリエンス得点（男女比較）

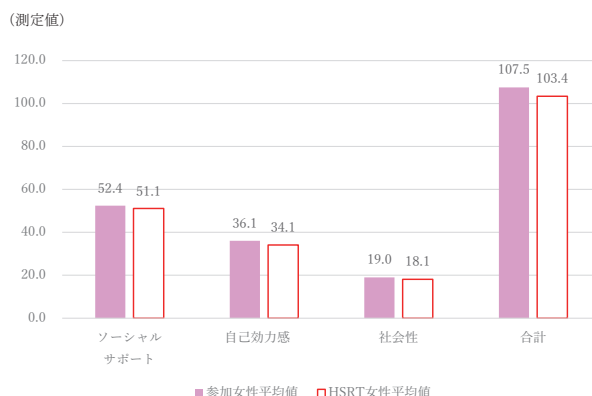


図10. レジリエンス得点（女性）

昨年末、2023年のスポーツシーンを振り返り2024年を展望する調査を実施した。後者の展望では「2024パリ五輪」に主眼を置いた。本研究所では2008年以降の全てのオリンピック競技大会において大規模調査を実施してきたが、今回相対的に際立って関心度が増えている競技はバスケットボールとバレーボールである。本稿ではその他の多様な競技も含め、パリ五輪に向けた期待の声をお届けする。

1. 2024パリ五輪の特徴

2024年の夏季オリンピック競技大会は、フランスの首都パリを舞台に、7月26日(金)から8月11日(日)までの17日間開催される。2020東京五輪(コロナ禍により1年延期され2021年に開催)の閉会式で放映された動画で示されたように、文化遺産との融合が大きな特徴であり、エッフェル塔前でビーチバレーボール、ヴェルサイユ宮殿で乗馬などが行われる。東京五輪で公式競技に加わったサーフィンはフランス領タヒチで開催され、新競技としてブレイクダンスが登場するなど、話題性十分の大会といえよう。

2. 本調査・分析の概要

2023年11月2日(木)から5日(日)までの4日間、調査会社のサンプルを利用し、国内在住の20歳から69歳までの男女1,000人を対象に、インターネット調査を実施した。サンプルの地域・年代構成比は、総務省統計局最新人口推計に準拠した。

調査内容は、「注目競技」を5競技まで、「期待選手」を5人まで、それぞれ理由と合わせて挙げてもらった。前者はあらかじめ用意した選択肢の中からの選択式、後者は純粹想起である。前者の競技数は公式には32であるが、日本オリンピック委員会(JOC)のWebサイト(<https://www.joc.or.jp/>)

paris2024/games/)に掲載されている47区分を参考に、一部を集約(自転車競技、馬術、カヌーなど)、一部を再区分(陸上競技を「トラック種目」「フィールド(投てき)」「マラソン・競歩」に分割するなど)して44の選択肢を用意した。後者の選手名については、表記ゆれを修正した上で集計している。

3. パリ五輪の注目競技

表1に示す通り、男女の回答者を合わせた総合1位は「サッカー」であった。男子は2022カタールW杯以降、以前にも増して海外での日本人選手の活躍が著しい。女子も2023年W杯のグループステージで優勝国スペインを唯一破ったその再現が期待されている。なお男性回答者の期待選手の1位は久保建英選手、女性回答者の7位は三笥薫選手であった。

回答者を男女に分けてランキングを算出すると、男性の1位はサッカーで変わらないが、女性の1位は「バレーボール」、2位は「水泳／競泳」となる。それを裏付けるように、女性回答者の期待選手の上位3人も、1位が石川祐希選手、2位が高橋藍選手、3位が池江璃花子選手であった。なお性差が顕著な競技の例としては、男性回答者寄り「サッカー」(ポイント差17.0)、「柔道」(同11.4)、「ゴルフ」(同6.5)、「レスリング」(同3.3)、女性寄り「バレーボール」(同3.3)、「水泳／競泳」(同2.2)、「バド

表1. パリ五輪注目競技ランキング

順位	総合 (N=1,000)		男性 (N=504)		女性 (N=496)	
	競技	比率	競技	比率	競技	比率
1	サッカー	22.9%	サッカー	31.3%	バレーボール	18.5%
2	バレーボール	16.9%	柔道	20.2%	水泳／競泳	15.9%
3	バスケットボール	14.8%	バスケットボール	15.5%	サッカー	14.3%
4	水泳／競泳		バレーボール	15.3%	バスケットボール	14.1%
5	柔道	14.6%	陸上／トラック種目		卓球	13.7%
6	体操競技	14.3%	体操競技	15.1%	体操競技	13.5%
7	卓球	14.2%	卓球	14.7%	陸上／トラック種目	11.1%
8	陸上／トラック種目	13.2%	水泳／競泳	13.7%	柔道	8.9%
9	バドミントン	6.7%	ゴルフ	7.3%	バドミントン	7.5%
10	陸上／マラソン・競歩	5.5%	レスリング	6.7%	スケートボード	6.0%

ミントン」(同1.5)、「スケートボード」(同1.9)が挙げられる。

続いて、本研究所が実施してきた過去の夏季五輪の事前調査と対照して前例のない形で上位に食い込んだ特筆すべき競技について触れたい。それらは女性回答者において1位となった「バレーボール」と、総合3位の「バスケットボール」の2競技であり、ともに2023年度にW杯が開催されたことを共通点とする。

前者については、世界ランキング8位で臨んだ女子日本代表は、初戦からセットカウント3-0の無傷の5連勝を飾った。W杯でのパリ五輪出場決定はならなかったものの、同1位のトルコに対して1セットを先取るなど善戦(結果は1-3で敗戦)し、最終戦のブラジル(同4位)戦も最終セットまでもつれる熱戦を演じた。他方、世界ランキング5位で臨んだ男子日本代表は、対照的に序盤で崖っぷちに立たされるも、4連続ストレート勝ちにより劇的な形でパリ五輪出場の切符をつかんだ。最終のアメリカ戦(同2位)も2-3の惜敗だったことに加え、上述で期待選手の1位にも挙げた石川祐希選手の世界最高峰リーグ・セリエA

での活躍が、五輪本選への期待をより一層高めている。

後者については、2020東京五輪において女子日本代表を銀メダルに導いたトム・ホーバス氏が、今度は男子日本代表を率い、初めて一部国内開催(沖縄アリーナ)された2023年のバスケットW杯において、フィンランドやベネズエラといった格上チームを次々に撃破し、48年ぶりの自力での五輪出場を決めた。男性回答者の期待選手3位にはパリ五輪こそ参加が熱望される八村塁選手の名が挙がり、女性回答者においても、W杯で活躍した河村勇輝選手が4位に、渡邊雄太選手が8位に食い込んだ。

表2はパリ五輪注目競技の総合ランキングTOP25とその理由の抜粋である。本稿で詳しく取り上げられなかった競技についても、それぞれ熱い想いが綴られている。本研究所ではパリ五輪を研究対象に、事前と事後に調査を実施し、それぞれプレスリリースを予定している。それらのリリースが、文化と融合した平和の祭典における代表選手の躍動を後押しし、感動を振り返る一助となれば幸いである。

表2. パリ五輪注目競技とその理由

総合順位	競技	比率	理由
1	サッカー	22.9%	・A 代表が絶好調なので、五輪代表も観たい(茨城県 40 代男性) ・なでしこジャパンに頑張してほしい(滋賀県 60 代男性)
2	バレーボール	16.9%	・ワールドカップで盛り上がったから(長崎県 60 代女性) ・高橋藍選手と石川祐希選手のプレーがみたいから(滋賀県 50 代女性)
3	バスケットボール	14.8%	・W 杯も盛り上がったし気になるから(愛知県 30 代女性) ・女子も男子も強くなってきたから(神奈川県 30 代女性)
	水泳/競泳	14.8%	・メダルが期待できる(埼玉県 60 代男性) ・泳ぐのが好きだからプロの泳ぎを見たい(神奈川県 40 代女性)
5	柔道	14.6%	・柔道人口の多いフランスで、日本柔道がどこまで通用するかが楽しみ(福岡県 50 代女性)
6	体操競技	14.3%	・世界王者橋本に注目(岩手県 60 代女性) ・金メダルに期待している(埼玉県 50 代男性)
7	卓球	14.2%	・中国にどのくらい通用するか楽しみ(群馬県 50 代男性) ・雄叫びを聞きたい(愛知県 50 代女性)
8	陸上/トラック種目	13.2%	・毎回新記録がでたりして楽しいから(岐阜県 30 代女性) ・男子 400mリレーでリベンジしてもらいたいから(福岡県 50 代女性)
9	バドミントン	6.7%	・東京五輪が不発だったので、パリでいつもの活躍を(大阪府 40 代女性) ・メダルラッシュに期待している(新潟県 40 代男性)
10	陸上/マラソン・競歩	5.5%	・オリンピックの華だから(愛知県 50 代男性) ・2 時間切りが見れるかもしれないから(東京都 30 代男性)
11	レスリング	5.1%	・男女ともに活躍を期待しているので(愛媛県 50 代男性)
	スケートボード	5.1%	・前回大会で魅力的で面白い競技と認識したので(山梨県 40 代男性)
13	ブレイクダンス	4.4%	・エンターテインメント色の強い運動が見られる楽しさ(愛知県 20 代女性)
14	ゴルフ	4.1%	・プレーの参考にしたい(岡山県 20 代男性)
15	テニス	3.4%	・大坂なおみが復活できるか?(岩手県 50 代男性)
16	新体操	2.8%	・演目が華やかで元気をもらえるから(東京都 20 代女性)
17	陸上/フィールド(投てき)	2.4%	・世界王者北口に注目(岩手県 60 代女性)
18	スポーツクライミング	2.2%	・超人的な肉体の競いが面白い(大阪府 40 代男性)
19	水泳/アーティスティックスイミング	1.9%	・競技もだけど衣装やメイクにも興味がある(鹿児島県 30 代女性)
	フェンシング	1.9%	・太田選手の時から少しルールがわかり、楽しくなった(埼玉県 30 代女性)
	7 人制ラグビー	1.9%	・W 杯で面白さを知ってしまったため(北海道 40 代男性)
	サーフィン	1.9%	・カッコいい選手が多いから(神奈川県 50 代女性)
23	ボクシング	1.6%	・第二の村田や井上尚弥の出現(静岡県 50 代男性)
24	3x3 バスケットボール	1.2%	・スピード感溢れる勝負が期待できるから(東京都 20 代男性)
	馬術	1.2%	・ベルサイユ宮殿(福島県 60 代女性)

アリーナの社会的意義を考える ～プロバスケットボールの視点から～

経営学部 教授

木村 剛

この冊子が創刊された当時、たまたまバスケットボール（bjリーグ）の調査に携わる機会を得て、このように書いた記憶がある。「日本のプロ・バスケットが軌道に乗るためには最低、3つの条件をクリアしなくてはならない」。あれから十数年を経て、その3つの条件がクリアされたように思われる。ただここで得た浮上のきっかけをものにできるかは、ここ数年の取り組みが重要だ。ソフト面での強化が選手やチームの強化、コンテンツの整備などだとすれば、ハード面の強化で重要な役割を担っているのがアリーナの整備である。スポーツ庁の「スタジアム・アリーナ改革指針」を受けて現在日本では急速にアリーナの建設が進められている。今回はこうしたアリーナの意義とあり方について考察していく。

1. 機会を得た日本バスケットボール界

筆者は10年前に書いた論述にて、バスケットボールが数あるプロスポーツの中で、一定の地位と国民からの認知を得る最低条件として、次の3つの条件を掲げた。第一に、プロ・リーグを統一し1つにまとめることである。これは当時実業団リーグとbjリーグという2つの国内最高峰のリーグが存在していたことによる。第二に、世界と戦う姿をみせることである。当時、サッカーもワールドカップの常連になるにつれて人気が高まり、同じ室内のスポーツでもバレーボールはオリンピックでメダルを獲得してきた実績があった。最後に、エンターテインメントを念頭に置いたアリーナをつくることである。実は当時、この3つの条件を満たすことはかなり厳しいと考えていて、特に2つ目の世界と戦う姿は、当時の日本の実力からいっても、かなり困難であると考えていた。

しかし、それから十数余年が過ぎて、状況は一変したといつてよい。毀誉褒貶もありながら、Bリーグが誕生し単一のリーグの下にバスケットボール界が一応のまとまりをみせた。世界と戦う姿については、世界最高峰の米NBAに数名の選手を輩出した。さらに、2023年に行われたワールドカップでは、これまで歯が立たなかったヨーロッパ勢に劇的な逆転勝利を収め、それが日本（沖縄アリーナ）で開催されたことと地上波で生中継されたこともあって、大きく報道されたことは記憶に新しい。その勢いのまま、パリ・オリンピックの出場権を自力で獲得したことは大きな意味があった。ここで負けていれば、また数年、バスケットボールは浮上の機会を失っていたに違いない。この日の勝利は、日本のバスケットボール界を変えた試合と称されても過言ではないだろう。また3つめの条件として掲げていたアリーナの整備についても、2016年11月に公表された「スタジアム・アリーナ改革指針」がスポーツ庁から出され、これを契機に、スタジアム・アリーナ改革が一気に加速化していくこととなった。

こうした変化はもちろん、日本のプロ・バスケット界にとっては強力な追い風となった。事実、ワールドカップ以後の観客動員数には目を見張るものがあるし、人気選手が所属している試合はアウェーであっても満員になるほどの盛況ぶりである。バスケット界にとっては千載一遇のチャンスであると言ってよい。今はまだ小さな火を、より大きな炎にするために、こうした変化を見越してBリーグ・島田チェアマンの改革は動き出している。

2. アリーナの必要性

Bリーグの改革については別途、考察していくつもりだが紙面の都合もあるので今回本稿では特にアリーナに限定して考察

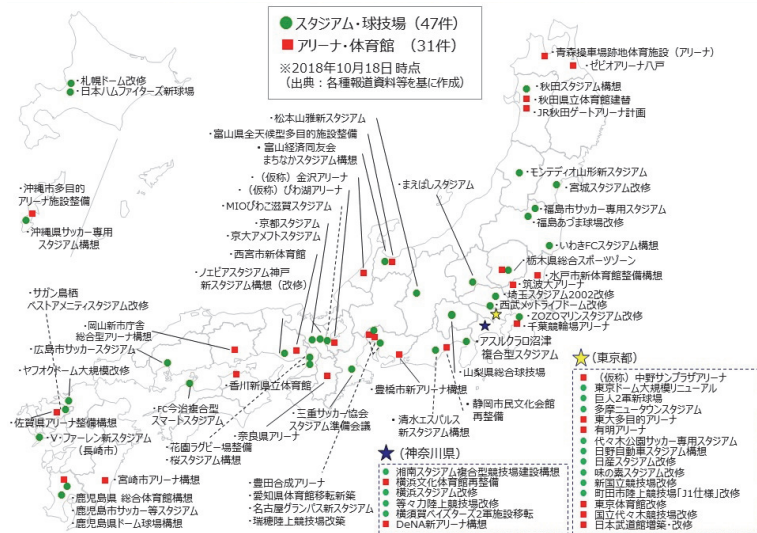
していくことにする。先に述べたように、日本では現在、各地でアリーナの整備が進められている。現在建設中のアリーナも多く、ここにきてその勢いは増しているように見える。その主たる要因となっているのが、端的に言えば国が建設・設置を推進する方向を明確に打ち出したことにある。また、それに伴って、エンターテインメント産業が熟成してきたこともうかがえる。コンサート、ライブなどでは演出が高度化し、それに対応するかたちで整備がすすめられてきた。ちょうど昔からあったホールやアリーナが改修や建替え時期を迎え、現代的なアリーナに変わったことも一因であろう。

体育館とアリーナは根本的に異なる。その意味で日本には体育館はたくさんあるが、アリーナはそれほど多くなかった。いずれ他所で検証する必要があるが、その根底には、日本ではスポーツは自分自身を鍛錬するためのものであって、ごく一部のスポーツを除いて他人に見せるものではないと言う考えがあるように思える。結果、原則として体育館には観客席は少なく、あっても極めて限られたスペースであり、競技を見せるということに重きを置いてこなかったこともあるだろう。

こうした現状に対してスポーツ庁は、「多様な世代が集う交流拠点として地域活性化の起爆剤となり得るスタジアム・アリーナの潜在力を最大限に発揮することがスポーツの成長産業化には不可欠」として、政府の未来投資戦略2017（平成29年6月9日閣議決定）においても、2025年までに20か所のスタジアム・アリーナの実現を目指すことを具体的な目標として掲げ、積極的にアリーナの建設を推し進めてきた。平成28年7月には、スポーツ庁と経済産業省が、国土交通省や観光庁の関係省庁、プロスポーツリーグ関係者、自治体関係者等の協力を得て立ち上げた「スタジアム・アリーナ推進官民連携協議会」のもとにワーキング等を開催し、具体的な課題について検討を行い、スタジアム・アリーナ改革の基本的な考え方や具体的手段をとりまとめ、スタジアム・アリーナ改革の方向性を整理した『スタジアム・アリーナ改革指針』（平成28年11月公表）、民間資金活用のポイントを整理した『スタジアム・アリーナ整備に係る資金調達手法・民間資金活用プロセスガイド』（平成29年5月公表）、民間目線での収益性向上のポイントを整理した『スタジアム・アリーナ運営・管理計画検討ガイドライン』（平成30年7月公表）などを立て続けに公表してきた。

こうした動きと軌を一にするように、各自治体は地域経済の起爆剤としての期待もあって、アリーナの建設を掲げてきたという経緯がある。図表1は、近年の主なアリーナ建設についてまとめたものである。

図表1：官民戦略プロジェクト「スタジアム・アリーナ改革」



出典：スポーツ庁WEBマガジン「DELPORTARE」2024/3/25アクセス

国及び地方自治体のアリーナ推進とBリーグが各クラブに促しているアリーナの整備との相乗効果もあり、アリーナの整備は進んでいることがうかがえる。とくに2024年は新アリーナの稼働ラッシュで次年度以降も、建設計画が予定されているアリーナも多い。

図表2：建設ラッシュとなっているアリーナ

設立年(稼働予定を含む)	アリーナ名称(仮称を含む)	主にホームとして使用予定のBリーグクラブ
2021年	沖縄アリーナ	琉球ゴールデンキングス
2022年	SAGAアリーナ	佐賀バルナーズ
2024年	LaLa arena TOKYO-BAY	千葉ジェッツ
2024年	KOBEアリーナ	神戸ストークス
2024年	長崎アリーナ	長崎ヴェルカ
2024年	横浜BUNTAI	横浜ビー・コルセアーズ/横浜EX
2024年	青森市アリーナ	青森ワッツ
2025年	愛知国際アリーナ	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
2025年	TOYOTA ARENA TOKYO	アルバルク東京
2026年	アイシンアリーナ	シーホース三河

3. アリーナのメリットとデメリット

アリーナ建設にはメリットとデメリットがある。筆者もいくつかのアリーナ建設に関する協議会に関わったが、メリットとデメリットは必ず存在し、市民からの賛成と反対も拮抗する。近年の景気低迷状況を考えると、否定的な意見が多いのも事実であり、計画が出来上がっても議会で否決され中断、中止になるケースも少なくない。

私見も含まれるが、新アリーナ建設に関連する記事をレビューしてみた結果、一般的に言われているアリーナ建設のメリット・デメリットについて整理したものが図表3である。

図表3：新アリーナ建設に関連するメリット・デメリット

メリット	デメリット
スタジアム等に比べて比較的建設コストが安い	他のスポーツ施設に比べ比較的安いとはいえ、建設費が高額で、公金の投入には反対がある
屋根があるため天候に左右されない	設置後の維持・管理コストがかかり、その後の活用計画も不透明になりがち
球場などと異なり、ライブやイベントなど、多目的利用しやすい	残されている大きな土地が少なく、特に大都市圏では地価が高く建設が難しい
新しい建築物なので、地震などに強く、バリアフリーにも配慮されているので災害時などに基点となる	

実際にアリーナ建設に関連する計画段階から建設実施までのプロセスについて新聞記事を中心にレビューしてみると、最も感じるのは地域ごとの事情が大きく関わっており、その温度差が大きいことである。図表3をみてもわかるように、メリットはある程度明らかであり、確かに存在する。ただ、そのメリットを得るためにそれだけのコストをかけるかどうかが問題となる。いずれにせよ最大のネックとなるのは建設コストであることは言うまでもない。

地価によって総事業費にも大きな開きがあり、一概に高いとか安いとは一概には言えない。例えば今回ワールドカップを開催した沖縄アリーナの総事業費は約162億円と公表されているが、これが高いか否かは今後の活用状況によってのみしかわからない。ちなみに不思議なことに、開業したアリーナや建設中のアリーナに関して調べてみたが総事業費については公開されていないものも少なくない。

このアリーナの建設費の捻出には実は様々な方法がある。沖縄アリーナの場合、内閣府の沖縄振興特定事業推進費や防衛省の再編推進事業補助金などが活用された。一般的な方法として有名なのが「PPP (Public Private Partnership) 方式であり、簡単に言えば官民連携を意味している。「PPP方式」には、運営権を一定期間、民間に売却するコンセッションの他、民間コンセッション会社のパフォーマンスに応じて政府が一定の対価を払うアベイラビリティ・ペイメント型、民間が建設や資金調達を担い、完成後に公的セクターに所有権を移転した上で同一の民間が運営を手がけるBTO (Build Transfer Operate=建設・移転・運営)、民間が建設と維持管理、運営し、契約期間が終わった後に所有権を公共に移すBOT (Build Operate Transfer=建設・運営・移転) などさまざまな形がある。どの方式が適しているかは様々な見解があるので、一概には言えないが、1つだけ言えることがあるとすれば、その地域の特性と建設計画時の環境によって、ベストな方法は異なる。この点については、今後新たに誕生したアリーナの活用状況を見ながらアリーナのビジネスモデルを検証していくことが必要だ。

4. 今後のアリーナに求められるもの

「新たな交流拠点創出で地域経済活性化に貢献する」これが、現在、国が推進している「スタジアム・アリーナ改革」のキャッチコピーである。アリーナの是非が問われるのは、オリンピック施設と同様にその後、いかに活用できるかにかかってくる。その意味で一律的にアリーナ建設を推し進めていけばよいのかについては、慎重な検討が必要だ。アリーナは多ければ多いほど良いというものではない。その意味で、BリーグがBプレミア参入の条件としている収容人員5000人以上のアリーナというのは、Bリーグのチーム数から考えると、その程度の数の大型アリーナが日本全国に建設されることは、バランス的にもまずまず理に適っているといえる。

一方で問題となるのは、中小規模の体育館などを近代的な設備にしたモデルはまだほとんどないことである。中都市であれば2000人~3000人規模のアリーナがあれば十分である。大アリーナ、中アリーナ、小アリーナのすみ分けができ、それに合わせたコンテンツを提供することが出来れば最適である。そこで意識すべきもう1つのポイントは、こうしたアリーナ整備が持つ文化的な意味合いである。少子高齢化により、人口減少が確実な日本にあって、防災の観点からもアリーナ整備と連動した活用方法の検討が望まれる。

2023年度 本学姉妹校 銘傳大学 「スキー・日本文化体験研修」実施報告

スポーツマネジメント研究所

研究員 駒澤 恵一、高瀬 裕也、中川 直樹

客員研究員 行方 剛

本研修は2018年度に初めて実施され、今年度の開催で3回目を迎える。2020年度～2022年度の3年間は新型コロナウイルス感染症の世界的流行から開催を見送っていたため、今年度は4年ぶりの開催となった。4年前の研修では日本滞在をスキー研修に特化したプログラムであったが、今年度はスキー研修に加え、本学自由が丘キャンパス訪問を含む、東京近郊での自由行動を新たにプログラムに追加した。参加者のアンケート結果を含め、今年度の研修実施結果として報告する。



1. 研修実施概要

今年度の本研修の概要は以下の通りである。

- ①日程：2024年2月12日（月）～2024年2月17日（土）
（うちスキー研修は2/13（火）～2/14（水）で実施された）
 - ②参加者数：銘傳大学学生25名（男性6名、女性19名）、引率教員2名（男性1名、女性1名）
 - ③開催地：スキー研修は新潟県湯沢町「かぐらスキー場」、本学自由が丘キャンパス、その他班別自由行動（東京近郊）
 - ④宿泊先：ロッヂ サンモリッツ
- ※本報告は研修前半のスキー研修について報告するものとする。

2. スキー研修

台湾では雪を見る機会がほとんどないため、スキーを経験している学生（特別な記載がない限り、以下銘傳大学の学生を指す）はほとんどいなかった。そのため、日本人に対する初心者指導以上に、丁寧かつじっくりとスキーの指導を行った。

スキー研修を実施する湯沢町の宿舎についてすぐに開講式を行った。開講式では研修中のスケジュールの紹介や各施設・ス



キー用具の使い方を紹介した。質問も多く出て、台湾と日本の文化の違いを一つずつ確認し、翌日からのスキー研修に備えていた。

到着翌日のスキー研修初日は、スキー板の履き方から説明を行った。初めて履くスキーブーツの重さとスキー板の取り回しの難しさに戸惑う学生がいたものの、指導員の説明により徐々に歩く感覚を身につけていった。また、スキー研修を行った2日間も雪景色を楽しんでいる姿が印象的であった。

初日の午後には技術レベル別にグループを再編し、一番上達が早かったグループでは初日の終わりにはスピードコントロールがしっかりできるようになり、リフトに乗って初心者コースを滑り下りるレベルに達していた。上達に時間を要したグループも2日目のスキー研修終了時までにはリストに乗る経験ができ、台湾ではなかなか乗る経験がないリフトに感嘆の声を上げていた。

また、初日は本学上野理事長から昼食が振る舞われ、午後からのレッスンに向けて頑張る姿が見られた。日本の食文化にも興味がある学生にとっては、スキー場の食事もある特別なことのようにであり、スキー体験と同じくらい日本の食文化も満喫しているようであった。

実質的にスキーを体験できる期間は1.5日と非常に短いものであったが、「スキーは大変疲れ、全身筋肉痛になったがとても面白かった」との感想も聞かれ、スキーの経験がない学生にとっても貴重な経験になったことようである。

2日間のスキー研修の間に、講習内検定によるバッジテストが行われ、参加学生のうち2名が3級に、21名が4級に、2名が5級に合格することができ、全員合格という結果を残すことができた。



3. 日本文化体験

湯沢町滞在中には、スキー研修以外に日本の文化を体験できる催しを準備していた。湯沢町での滞在期間が長くないため、スキーの疲れを考慮して一部の催しは希望者のみの参加としたが、ほとんどの学生が意欲的にいずれかの催しに参加し、日本の文化を目一杯楽しみながら体験していた。

①雪遊び体験

今年度は積雪が少なく、スキー場以外では雪遊びできる雪が多くはなかったものの、積もっている雪を集めて雪だるまを作る者、雪を小さく丸めて雪合戦を始める者、積もった雪に飛び込み冷たさを感じる者、各々が雪に触れ楽しんでた。特に雪合戦はスキー研修中の隙間時間にも楽しむ様子が何え、毎回大いに盛り上がっていた。



②共同浴場体験

数名の希望者が近隣にある「宿場の湯」を利用した。宿泊先にも温泉施設はあるものの、より広い湯舟に地元利用者と一緒につかる経験は、まさに日本ならではの文化体験だったと言える。自然に囲まれた中にある温泉施設の利用は解放感に包まれ、スキーによる疲れも癒された様子であった。

③餅つき体験

スキー研修2日目には、田代・二居観光協会様のご協力を得て、餅つき体験を行った。「餅つき」自体は多くの学生がイメージできるようであったが、ほとんどの学生は餅をついた経験はなく、杵も臼も見るのが初めてという声が多く聞かれたが、重い杵を担いでもち米をつくことの難しさ・大変さを経験した上で、できたての餅を食すのは格別の喜びであったようである。

また、日本文化体験研修の催しではないものの、宿舎の従業員の方に日本語でコミュニケーションを取ろうとする場面や、



売店に買い物することで販売員と話す機会を得ようとする学生の姿が見られ、自ら文化体験の機会を積極的に作る様子もうかがえた。



4. 日本人学生との交流

スキー研修2日目の夜には歓迎会を実施し、湯沢町の田村正幸町長ならびに本研究所の行方剛客員研究員からご挨拶をいただいた。通訳を介してではあるものの、自分達が大いに歓迎されていることはしっかり伝わっている様子で、中国語に通訳する前からうなずく学生の姿が多く見られた。

4年前と同様に歓迎会終了後には、本学（産業能率大学）の学生と接点を持つための交流会を設けた。4年前の参加者の様子を見ても、銘傳大学の学生にとって同年代の学生と接点を持つことは非常に有意義であると考えられたからである。さらに、本学の学生にとっても言葉の壁を越えて互いにコミュニケーションを取ることは日常にない体験であり、良い刺激になったと考えられた。本研修にはサポート役（本学では「SA（チューデント・アシスタント）」と呼ぶ）としてスキー同好会のメンバー3名が参加していた。さらに、本研修と同時期に開講されていた「シーズンスポーツA（スキー）」科目が、かぐらスキー場



にて合宿授業を実施していたことから、今年度の履修者5名も交流会に合流した。互いに英語が第2言語ではあるものの、中国語・日本語を交えながら楽しそうに意思疎通を図っており、終了後にはSNSを通じてコンタクトを取る様子も見られた。

5. まとめ

今年度はスキー研修の期間を2日間に限定したこともあり、短期間で各イベントを実施した。台湾から日本への移動や、慣れないスキー研修による体調や怪我等の心配があったが、その心配も他所に大いにスキーと湯沢町の日本の文化を体験した2日間であったように思われる。朝の集合時の様子を見ていても元気に挨拶をする姿が多く見られ、4年前と比較しても食事もしっかりとっていた印象である。2日目のレッスン終了時には、希望者には延長レッスンを実施したが、希望者を募ったところほぼ全員の学生が延長レッスンの受講を希望した。コロナ禍で日本をはじめとして海外に行く機会が減ってしまったことが、逆に今回の研修に対する期待と楽しみにつながったものだと考えられる。

また、湯沢町に到着した初日には本研修の開講式ならびにオリエンテーションを実施したが、台湾からの長い移動により疲れているにも関わらず、数多くの質問が出ていた。スキー研修を楽しもうとする姿と日本の文化を体験したいという思いが、表現されていたように思う。さらに、「レンタルウェアを交換したい」、「お菓子を買いたい」、「冷たい水を飲みたい」、「大浴場の使い方を教えてほしい」と、積極的に意思表示をしていたことが大変印象的であった。

6. アンケート

スキー研修実施後に参加者にアンケートを取っている。4年前に実施した際に同じアンケートを実施しているが、回答内容に共通点と変化した点が見られたので報告しておきたい。

アンケートでは「次に冬季の日本に滞在する際に行きたい場所」を聞いている。前回、今回とも一番人気は北海道であり、圧倒的に人気があることに変化はなかった。雪との接点が少ない台湾では雪と北海道へのあこがれが大きいことは普遍的であることが分かる。

一方、興味深いのは費用に関して変化が見られた点が挙げられる。「研修参加にあたり不安なこと」を確認する項目において、前は「費用が高い」が25.7%と高い割合を示したのに対し、今回は8.6%まで低下している。これは日本の円安傾向を表す結果であり、外国人旅行者にとって、日本は費用面で旅行がしやすくなっていることが考えられる。

それらを考慮すると湯沢をはじめとする雪の多い地域では、戦略的に台湾の旅行者を招致することが町の活性化につながる事が期待できる。

7. 謝辞

本研修は4年ぶりの開催となりましたが、湯沢町様、田代・二居観光協会様、田代スキースクールの方々をはじめ、関係される多くの方のご協力・ご支援のおかげで無事に実施することができました。また、本学上野理事長、鬼木学長にも多大なるご助言およびご支援をいただきました。ここに皆様に感謝の意を表します。

10

SANNOスポーツマネジメントのあゆみ (2004-2023)

本学は、湘南ベルマーレ、横浜 DeNA ベイスターズと提携関係を結び、情報マネジメント学部の授業科目の共同開発や研究活動を行ない、大学の行事や活動への協力など、数々の取り組みを展開してきました。本学のスポーツマネジメントの今日までの取り組みについて紹介します。

2004年

- 4月 『スポーツビジネス実践講座』開講
- 6月23日 湘南ベルマーレ SANNOサンクスデー開催

2005年

- 7月13日 湘南ベルマーレ SANNOサンクスデー開催

2006年

- 4月 スポーツマネジメント科目2科目を開講
- 6月21日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 10月 サッカー強化・人材育成プロジェクト開始
- 10月 湘南キャンパス第1・第2グラウンド改修

2007年

- 1月 横浜ベイスターズと提携
- 2月1日 サッカー部監督に坂下博之氏が就任
- 4月 情報マネジメント学部にスポーツマネジメントコースを開設
- 4月 横浜ベイスターズとの共同授業「スポーツ企画プロジェクト」開講
- 6月27日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 8月14日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催
- 10月 スポーツマネジメント研究所設置
- 10月 女子ビーチバレー部発足川合庶氏がヘッドコーチ就任
- 12月16日 湘南キャンパスにビーチバレーコート竣工

2008年

- 1月 湘南ベルマーレ・沖縄キャンプにて選手・コーチ陣を対象とするキャリア支援プログラムを実施
- 4月7日 ビーチバレーコート開設記念式典開催
- 5月 産業能率大学collaboration with 湘南ベルマーレ スポーツ教室スタート
- 6月25日 湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
- 8月30日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催
- 11月 サッカー部 関東2部昇格への初挑戦
- 11月20日 東京アパッチ 産業能率大学スペシャルゲーム開催

2009年

- 6月21日 SANNOスペシャルデー開催
- 8月 第21回全国ビーチバレー 大学男女選手権大会で準優勝(溝江/大原)
- 8月18日 湘南シーレックス 産業能率大学 スペシャルゲーム開催
- 10月18日 神奈川大学 サッカー秋季リーグ出場
- 11月14日 ビーチバレーフェスタ2009開催

2010年

- 5月 女子ビーチバレー部(溝江/石田) 平成22年度 日本バレーボール協会ビーチバレー強化委員会強化指定選手に選出

5月16日	湘南ベルマーレ SANNOSANKSデー開催
8月	第22回全国ビーチバレー大学男女選手権大会にて準優勝（大原/中村）
10月16日	ビーチバレーフェスタ2010開催
11月	女子ビーチバレー部 第16回アジアオリンピック評議会アジア競技大会出場（溝江）
11月	サッカー部 関東大学サッカー大会出場
2011年	
5月29日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月	女子ビーチバレー部関東大学ビーチバレー選手権大会で優勝（小林/石田）
8月	女子ビーチバレー部 第26回ユニバーシアード競技大会出場
8月	女子ビーチバレー部 FIVB ビーチバレージュニア世界選手権出場（石田）
9月11日	横浜ベイスターズ SANNOSPECIALゲーム2011開催
10月15日	ビーチバレーフェスタ2011開催
11月	サッカー部 関東大学サッカー大会出場
12月18日	ビーチバレーSANNNOオープン2011開催
2012年	
6月9日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
8月12日	女子ビーチバレー部 全国ビーチバレー大学男女選手権大会で初優勝（中村/石田）
9月29日	第21回よこすかカレーゲーム・産業能率大学スペシャルゲーム2012開催
10月20日	SANNNO CUP 2012開催
11月	サッカー部 関東大学サッカー大会出場
11月30日	女子ビーチバレー部第2回アジア大学ビーチバレー選手権大会（溝江/石田）
2013年	
1月26日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム
4月	サッカー部監督に加藤望氏が就任
5月25日	湘南ベルマーレ 産業能率大学 スペシャルデー開催
8月11日	女子ビーチバレー部 全日本ビーチバレー準優勝（清水 / 中丸）大学男女選手権大会
8月27日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2013開催
10月13日	SANNNO CUP 2013開催
10月21日	ビーチバレーSANNNOオープン2013開催
11月24日	サッカー部 関東リーグ2部昇格！
2014年	
3月21日	サッカー部 越智選手がU-19 日本代表候補選手に選出
5月31日	湘南ベルマーレ 産業能率大学 スペシャルデー開催
6月15日	2014FIFAワールドカップ ブラジル大会パブリックビューイング開催
8月9日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2014開催
8月10日	全日本ビーチバレー 大学男女選手権大会優勝（沢/足立）
9月21日	第3回SANNNOオープン開催
10月18日	SANNNO CUP 2014「砂にとびこめ！未来をひらけ！」開催
11月9日	Sports Policy for Japan 2014にて 小野田ゼミが優秀賞受賞
11月15日	サッカー部関東リーグ2部残留決定
2015年	
5月25日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
6月28日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2015「SHONAN COOL FES」開催
8月9日	ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2015優勝（鈴木/石坪）
10月18日	SANNNO CUP 2015「思いを伝えあう」開催
10月25日	湘南ベルマーレ 産業能率大学×自由が丘スペシャルデー 開催

11月15日	サッカー部神奈川県リーグから再スタートへ
12月5日	第4回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
12月25日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム
2016年	
4月23日	第40回 総理大臣杯 全日本大学サッカートーナメント 神奈川県予選 優勝
5月21日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー2016 開催
7月13日	第8回世界大学ビーチバレーボール選手権大会出場（石坪/鈴木）
7月28日	第27回全日本ビーチバレー女子選手権大会5名出場
8月3日	横浜 DeNA ベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム 2016「おいでよ！パレスタ☆ガーデ」開催
10月15日	サッカー部 神奈川県リーグを全勝にて優勝
10月16日	SANNO CUP 2016「笑顔の花を咲かせよう！」開催
12月4日	湘南国際マラソンのボランティアに本学学生が約70名が参加
12月10日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム開催
2017年	
4月22日	サッカー部 総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント 神奈川県予選 準優勝
5月27日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
5月27日	バレーボール部 28季ぶり関東2部リーグ復帰
6月17日	サッカー部 神奈川県大学サッカーリーグ・春季リーグ 優勝
7月2日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2017「セフエスタ（TANAFESTA）」開催
7月9日	第24回関東大学ビーチバレーボール選手権大会 9連覇
8月8日	女子ビーチバレー部 国際バレーボール連盟主催ビーチバレーボールU-21世界選手権大会 2017出場（小久保）
8月17日	女子ビーチバレー部 第29回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会 4連覇
10月14日	サッカー部 秋季リーグ 準優勝
10月29日	SANNO CUP 2017「その一瞬にすべてをかけろ」開催
12月2日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲームを開催
12月3日	湘南国際マラソン大会に本学学生がスポーツボランティアスタッフとして参加
12月21日	第36回大山登攀競技大会を開催
2018年	
5月19日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月7日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2018「SHONAN THEBOON（しょうなんザブーン）」開催
7月8日	ビーチバレーボール世界大学選手権大会 14位 石坪/柴（21ヶ国32チーム出場）
7月14日	ビーチバレーボールNEXT2018 第1回全日本ビーチバレーボールU23男女選抜優勝大会 優勝（若井/山田）
7月15日	第25回ビーチバレーボール関東大学選手権大会本学の10連覇を達成
8月7日	第30回全日本ビーチバレーボール 大学選手権大会 準優勝（若井/山田）
8月16日	第29回全日本ビーチバレー女子選手権大会に4人の部員が出場
10月20日	SANNO CUP 2018「やってみなきゃはじまらない」開催
11月3日	横浜ビー・コルセアーズ 産業能率大学スペシャルゲーム 開催
11月17日	第51回関東大学サッカー大会 昇格決定戦に勝利
12月11日	関東大学サッカーリーグ2部 昇格祝勝会を開催
12月20日	第37回大山登攀競技大会を開催
2019年	
2月12日	サッカー部2018年度プロ入団会見を実施
6月18日-23日	女子ビーチバレー部 FIVBビーチバレーボールU-21世界選手権大会日本代表出場（オト/永島）
6月30日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月6日-7日	女子ビーチバレー部 第26回関東大学ビーチバレーボール選手権大会 優勝（奥野/山田）

7月7日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2019「SHONAN De SPINNER」開催
7月20日-21日	女子ビーチバレー部 ビーチバレーボールNEXT2019 第2回全日本ビーチバレーボールU-23男女選抜優勝大会 優勝（奥野/山田）
8月6日-8日	女子ビーチバレー部 第31回全日本ビーチバレーボール大学選手権大会 3位入賞 （奥野/山田）
10月26日	SANNO CUP 2019「仲間を信じて突き進め！」開催
11月17日	横浜ビー・コルセアーズ スペシャルゲーム
11月23日	サッカー部 関東大学サッカーリーグ2部に復帰を12チーム中6位で残留
12月19日	第38回大山登攀競技大会 開催
2020年	
1月28日	サッカー部 プロ入団発表
8月7日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2020「ぴかぴかYOKOSUKA大作戦」開催
9月5日-6日	女子ビーチバレー部 第32回全日本ビーチバレーボール大学選手権大会 優勝（山田/オト）、4位（伊藤/野口）
10月31日	SANNO CUP 2020「オンラインキッズビーチ」開催
12月19日	サッカー部 関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中4位の創部史上最高成績で残留
12月6日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
2021年	
1月26日	サッカー部 オンラインで入団発表
7月10日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2021「湘南ハロハロ」開催
7月15日-16日	女子ビーチバレー部 第33回全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会 2連覇（山田/オト）、3位（伊藤/野口）
7月17日-18日	第3回全日本ビーチバレーボールU-23男女選抜優勝大会 1位（伊藤/野口） 3位（山田/オト）
7月25日	サッカー部 アミノバイタルカップ2021第10回関東大学サッカートーナメント大会 初優勝
9月1日	サッカー部 2021年度 第45回 総理大臣杯 全日本大学サッカートーナメント大会 初出場（ベスト8）
10月16日	SANNO CUP 2021「たくさんのありがとうを繋いで…」開催
11月27日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
11月29日	第9回ビーチバレーボール SANNO オープン 開催
12月19日	サッカー部 第95回関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中9位で残留
2022年	
1月27日	サッカー部 オンラインで入団発表
7月9日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2022「湘南Spark」開催
8月9日-11日	女子ビーチバレー部 アクティオ杯 ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2022/全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会 優勝（伊藤/野口）
10月15日	SANNO CUP 2022「今ここにしかない瞬間（とき）を大切に」開催
10月29日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
12月3日	第10回ビーチバレーボールSANNO オープン開催
2023年	
6月3日	湘南ベルマーレ 産業能率大学スペシャルデー開催
7月8日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2023「わくわく湘南COLORフェス！」開催
8月8日-10日	女子ビーチバレー部 アクティオ杯 ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2023/全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会 優勝（伊藤/野口）
10月14日	SANNO CUP 2023「つなげ、未来へのトス」開催
11月18日	サッカー部 第97回関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中8位で残留
11月18日	サッカー部 第97回関東大学サッカーリーグ2部 得点ランキング1位タイ（猪狩）
12月2日	女子ビーチバレー部主催 第11回ビーチバレーボール SANNO オープン 開催

SANNO SPORTS MANAGEMENT

Vol.16

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.16

2024年（令和6年）5月発行

< 編集 / 発行 >

産業能率大学 スポーツマネジメント研究所

〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573

TEL:0463(92)2211

©The SANNO Institute of Management. All rights reserved.

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.16 2024 (令和6年) 5月発行

編集 / 発行：産業能率大学 スポーツマネジメント研究所・〒259-1197 神奈川県伊勢原市上粕屋 1573・電話 0463 (92) 2211

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

